芭蕉文考

松島賦

考に此文風俗文選に有て、其基は奥の細道の中の文にして少しく違ふ処の物也。註は管孤抄に委し。其抄に扶桑は淮南子を引て「いにしへより日本の異名にもちい来れとも、実は別に一国の名也。爰にては俗に従て日本の事と見るへし」といふ。然共思ふに和漢朗詠集に「扶桑豈無影乎前中書王」又織田信長の頃僧玄興か「安土山之記」に「六十扶桑第一山」、又扶桑拾葉扶桑隠逸伝等に有。　○洞庭西湖共に中華の湖の名、浙江も三江の一也。　○杜甫望嶽詩に「諸峯羅立似児孫」　○古今集に「わかせこを都にやりて塩かまの籬の島にまつそ恋しき」　○籬の島は塩かまの浦の海中に有り古今集に「みちのくのいつくはあれと塩かまの浦こく舟のつなてかなしも」　○新勅撰に「世の中は常にもかもなきさこくあまの小舟のつなてかなしも」　○後拾遺に「ちきりきなかたみに袖をしほりつゝ末の松山波こさしとは」　○白氏文集長恨歌に「在レ天願ハ作二比翼鳥一ト在レ地願ハ為レ連理ノ枝ト」　○新古今「夕されはしほかせこしてみちのくの野田の玉川千とりなく也」(頭注「能因」)　○沖の石は八幡村百姓の裏に興の井有り三間四方の岩廻りは池也。所の者は沖の石といふ」　○千載集「宮城野の萩ややをしかのつまならん花さきしより声の色なる」(頭注「基俊」)　○後撰集「植し時契りやしけんたけくまの松を二度逢見つるかな」(頭注「元善」)　○塩竈明神は当国の一の宮　○雲居禅師は真壁平四郎家人にて禅家沢庵和尚と同時代といふ。　○瑞岩寺禅宗真壁平四郎出家して法心和尚といふ　○伊達政宗の事細道になし。　○屈曲をのつから以下の文細道には松島の景をいふ所にあり。是より前也。　○宵、字彙ニ音査也、深遠貌也、又音アウ。　○東坡西湖詩「欲レハ下抱二西湖一比ソト中西子ニ上淡粧濃未タ也相宜シ。　○法蓮寺の事むつちとり菅孤抄にも見えす。」　○大山祇は山神也。日本紀に有。　○正字通「天地陰陽万物生息謂二之造化ト一。　○字彙「工ハ匠也、又功力也。」、虞書「天工人其レ代ル」　○むつちとりに

松島辨

抑松島は扶桑第一の好風にして凡洞庭西湖を恥す。東西より海を入て、江の中三里浙江の湖をたゝふ。島〳〵の数を尽して、欹ものは天を指シふすものは波に匍匐、あるは二重にかさなり三重に畳て、左にわかれ右につらなる。負るあり、抱くあり児孫愛するか如し、松のみとりこまやかに枝葉汐風に吹たはめて窟曲をのつからためたるかことし、其気色窅然として美人の顔を粧ふ。千早振神の昔大山すみのなせるわさにや。造化の天工いつれの人か筆をふるひ詞を尽さん。予は口を閉て窓を開き、風

雲の中に旅寝するこそあやしきまでたへなる心地はせらるれ。

と見えたり。此文は細道と同しくして、松島の末の文の雲居禅師等の文をのそき、「風雲の中に旅寝するこそあやしきまて妙なる心地はせらるれ」とあるを出し、「口を閉て窓をひらき」の文を加へたる物也。是等を見て風俗文選の賦とせるは、はせをの紀行にくらふれは聊不審あり。和漢文操に支考云「此ころ我門の文集に松島の賦のことときは文章の中の大事といふへく、戦場の文も銀河の序も壺碑の結段なき、いつれも奥の細道より首尾を略して裁入れたるは、紀行は前書の法に似て記賦の体をつくすへきにあらす。もしや其集のかさりとてそれらの文章を裁入れは、そこに其子細を断るへし。先賢をあかむる法なり」とそ見えたり。其文章の中の大事とは今我らことときの愚案にはうたかひのはれぬをいふにや。松島は五十七島といふ、其数の中より此賦に

鎧島兜島牛島虵島内裏島屏風島籬ケ島

と其縁の名ある島をのみならへたる賦の体なれはにや。奥の細道には此名をならへたる事はなく、紀行には「塩竈の浦に入相の鐘を聞。五月雨の空聊はれて夕月夜幽に籬か島もほと近し。蜑の小舟こきつれて肴わかつ声〳〵、つなてかなしもとよみけん心もしられていとゝ哀也。」と、此文格別に感す。又賦に、

野田の玉川沖の石宮城野の萩武隈の松猶此境に名をならへたり

此文細道になく、此処〳〵は道もへたゝり松島一見よりは前の文にある地名なり。所名草木の対をならへて賦の体とせるにや。又銅灯籠に、

文治三年泉三郎寄進と記す。

是は紀行にはありて賦とする詮いかに侍るへきか。又

瑞岩寺は相模守時頼入道の建立。当三十二世真壁平四郎出家して入唐、帰朝の後開山す。

と是又細道にもあれと日記のことし。又細道に「雲居禅師の徳化に依て七堂甍あらたまり、金壁荘厳光を輝、仏土成就の大加藍とはなれり」とあるはおもしろく、此賦に

伊達政宗再興して七堂伽藍となれり。

とあるは日記の草稿にや。又賦に、

法蓮寺は海岸に峙、老松影をひたし花鯨波にひゝく

とあるは細道になし。又細道に島〳〵の景をいふ処に「負るあり抱くあり、児孫愛すかことし。松のみとりこまやかに」とつゝけたる所おもしろし。しかるに、風俗文選に弘く行れて、曲節鄙陋も交りてさま〳〵の体あるより文を書んとするにさたかならねは、只己〳〵か和漢の文の見聞のまゝに其才をはたらかすれは、他門蕉門のわかちもあらさるにや。

月見賦

和漢文操の注曰 △本朝名蹤志に近江の湖水の志に其形似二琵

嘗ニ云云。按るに爰の木曽寺とは木曽塚の義仲寺を摘て其名の風流を残し給ふにや。其地は祖翁の廟所也。　○百人一首に「三日の原わきてなかるゝ泉川いつみきとてか恋しかるらん」按るに、三日の原とは大津に泉屋といへる酒家有て三日の原といふ名酒より往来の騒人も其名に詩歌を残せりとそ。△信楽は近江にして政所といへる茶の名所也。　○玉川は盧同か標号也。茶歌は挙るに繁し。●楽天か詩は白氏文集に在て多は酒の称美也。　△源氏に尼の事をいへる詞に中〳〵なまうかひにてあしき道にそたゝよひぬへきとあり。潛(カツキ)の蜑の歌は挙るに及す。△論語の先進に三子者之言何如。子曰各言其志也已矣。按るに乙州以下は例に孔門の弟子鮮也。此故に此章は一字一言に人の生質をうつして、惟然法師か評に至つて空に風ふきてと云捨たる。春秋に一字の勧懲は知らす、文には隠見の絶妙と称すへし。　△列子に伯牙と子期と知音の事有り。峨々洋々は琴中の趣也。　●杜詩に飲中八仙の歌あり。総て高名の風人也。挙るに繁し。△つれ〳〵草に「よき友三あり一には物くるゝ友。二にはくすし。三には知恵ある友云云」　○兼好の歌に「こゝも又浮世なりけりよそなから思ひしまゝの山里もかな」△絵本抄に李曰か滝見の図あり。飛流三千尺の詩によれりとそ、△蘇東坡か赤壁賦に有レ客無レ酒、有レ酒無レ肴。或ハ曰ク挙レ網ヲ得レ魚、状如シニ松江之鱸ノ一、或日我有ニ斗酒一待ニ不時ノ之需メテニ云云。　按るに此賦には前後の赤壁を取合せて、多くは古語の裁入なり。以下の相紋は爰に見るへし。躬恒か歌「しら雲にはねうちかはし飛雁の数さへ見ゆる秋の夜の月」●三体詩楓橋夜泊「月落烏啼霜満天」。按るに鏡山以下に多く湖上の八景を挙たるに、帰帆は今宵(モテナス)饗に似たりとは此寺の結前絶妙と称すへし。△七小町の事は諸抄に此名有て、細に挙に及す。小町か一生の盛衰を云へり。按るに此発句は東坡か西湖の詩情を含み、源氏供養の風情に寄せて月の艶色を形容せる浮の字は鎖詞の絶妙と称すへし。△紫式部は源氏の趣向を祈るとて石山に参籠して六十帖の面影を写せりとそ。●蘇居士とは東坡也。西湖の詩に若抱ニ西湖一比ニ西施ニ淡一粧濃抹両相宜。按るに此一対は式部に居士の官名といひ、源氏ニ越女の字義といひ、此等を俳諧の筆格にして和漢に意対の絶妙と称すへし。　△漢武古事に擎ケテニ芙蓉掌ヲ一承レ露云云。仙術を学ふ事也。　△竹林七賢の寄せ也。細挙に及す。按るに竹の林とは酒に竹葉の響より畢竟は酒の枕詞ともいはん。まして此対の短簡なから赤壁の両語を裁入て文に錯綜の絶妙と称すへし。○西行の歌に「谷の戸にひとりそ松はたてるなる我のみ友なきと思へは」●詩格に唐賈島騎レ驢得レ句、鳥宿池中樹、僧推敲月下門、推敲未定、引テレ手作ニ推敲勢一、時衝至ニ韓愈行隊ニ一島具道レ得テレ所ヲ愈曰敲字佳並レ轡帰為ニ布衣交ヲ一云云

同評曰此賦は元禄の始ならん、湖南の幻住庵に山住の時祖翁と先師と文章の評論有て、仮名真名の通用より俳諧の家の筆格を建へきと、百練千鍛の斧を加へて、祖翁は月の賦に四六

の法をやはらけ、先師は文の賦に五条の式を伝ふ。さるは百世の家訓にして無下の俳集に入む事をおそれて、獅子庵の遺稿に十襲せり（頭注「掩テ二其不レ備日襲」）しからは本朝文鑑に先とて出すへかりしを、季吟老人の硯賦に敵せは師を軽んするに似てんとて既望賦の幽玄なる物を対す。それらは選場の心得にして百世に文鑑の時宜といひ道をおそるゝ冥加といはん。今や文操の本懐といふは真名には菅家の賦をゑらみ仮名には兼好の文を対す。そなたは文章の博士にして、大和に真名の祖とあふくへく、こなたは風雅の隠者にして一道の意地の師とあかむへし。しかれとも二篇を評せは、我家の談笑にとほしけれは、あなかちに温故の辞宜にして一部の詮する所といふは月見賦に仮名の真名なるを知り、文の賦に真名の仮名なるをしらは、雪賦は虚実の文対にして和漢に文を操（アヤトル）といへる標題の心をもしるへきとなり。誠に此賦の婉麗にしてしかも談笑の自在なる、そこを我家の筆格にして文章はよし五箇の絶妙に感却すへし。此故に此賦には句読に我家の式をわかち、文の賦には助語の圏点を加ふ。一部の新製は此篇にしるへきなり。

考るに評に此賦無下の集に入ん事を恐れて獅子庵の遺稿にのみなれは、支考独にて外に証とすへきなく、又いふ既望賦の幽玄なる物を対すと。しからは此賦は幽玄ならぬものなるへく、さるを学ふ時は初心に花過侍らん、いふかしきの一条也。又、元禄二年象潟にて「象潟の雨や西施かねふの花」と其景色を美人に比し、又此湖水を美人に比す。はせを元禄七年「清滝の波に塵なし夏の月」は「白菊や目にたてゝ見る塵もなし」と似たれはとて「青松葉」の句になしかへんといふ。其心よりして此句出せる事心得かたし。又貞享二年には「唐崎の松は小町か身のおほろ」と吟して、鍛練の後「松は花より朧にて」と極りしと千那物語鎌倉海といふ集に見えたり、いつれを是とすへきや。支考か文の風調は此賦を学へるか。又は此賦は支考か黙撿に加筆ありしや。うたかはしきをかいて此賦はしはらく学はすとも事かくましくや。

既望賦

本朝文鑑の註曰、此賦は誠に瀏亮にして（頭注「瀏ハ水清貌、又水深貌、亮ハ明朗」）全く賦の体を尽せるといはん。されは鏡山の一節より古歌には月の雲を寄せて此に其夜の亭主振をいひ、古詩には玉塔の喩を借て千躰仏の光を添ふ。尤故事古語の用い所は此等の摘採に知るへき也。本より先翁の文章は獅子庵の遺稿にも数多なから、或は湖東の文選に入或は門下の俳文集に出て、今や再選するに及はす。譬へ百篇を見尽すとも、此一篇の趣意を見て此一篇の虚実を知らは、和歌の幽玄も爰に明かに俳諧の頓挫も爰に明ならん。去るは黄門の詞にすかりて歓楽の哀情わすれさるは、例に楽んて淫せすとや斯翁に於て斯文なからんには。

考るに此賦小文庫（頭注「小文庫、元禄九年史邦選」）には堅田

十六夜之辨とあり。賦と題せるは後か。○古文真宝に欧陽永叔か醉翁亭の記あり。醉翁之意不在酒、在二乎山水之間一也下略。　○古文前集に李白か対レ酒憶二賀監一ヲ詩に狂一客帰二四一明二。注二加知章自ラ号二四一明ノ狂一客ト一。○天台山一名四明といふ。○比枝の山天台宗伝教大師開山。（頭注「従三位行恵」）○新千載集「代々の跡を忘れすてらせ水茎の岡の浅ちの秋の夜の月」水茎岡江州。　○十二峯望霞・翠屏・朝雲・松巒・集仙・上昇・聚霞・浄壇・起雲・栖鳳・登竜・聖泉是を巫山の十二峯といふ。湖水に山多きをたとふ。（頭注「三体詩李渉カ詩二十二峯頭月欲レ低ケタラント」）　○三体詩、日出三竿春霧消解云三竿ハ月昇貞。　○山家集に「中〳〵にとき〳〵雲のかゝるこそ月をもてなすかさりなりけれ」○「もちといひてみつれはやかてかく月のいさよふほとや人の世の中・武田信玄」○新勅撰「あけは又秋のなかはも過ぬへしかたむく月のおしきのみかは」（頭注「定家」）　○恵心僧都往生要集あり。恵心は法然上人より前の念仏弘通。　○蒙求に王子猷嘗居山陰夜雪初霽月色清朗四望皓然独酌酒詠左思招隠詩忽憶戴逵時逵在剡便夜乗船詣之経レ宿方至造門不前而返人問其故曰本乗興而来興尽而反何必見安道邪。　○三体詩張継カ楓橋夜泊ノ詩に月落烏啼テ霜満レ天、江楓ノ漁火対二秋眠一、姑蘇城外ノ寒山寺、夜半ノ鐘ノ声到二客船一。　○此賦は支考かいへる花やかなるにもあらす、東坡か赤壁の賦のおもかけあれと、詞と題すともさまたけあるましくや。小文庫には弁すれはいつれに題名さたかならす。

烏　賦

考に大和本草に曰、「本邦慈烏烏鴉あり。慈烏といふは小也。常のからす也。烏鴉はハシフトといふ。觜大にして性貪る。慈烏より大也。」本草綱目時珍曰、「此鳥初生母哺六十日。長則反甫六十日。可謂慈孝矣。」　○淮南子「烏鵲塡レ河ニ成レ橋而渡二織女一。」　○叙事格物論烏鴉条下ニ一種大啄白頸南人謂二之テ鬼雀一ト一鳴則有凶咎。　○古文前集、李紳カ憫レ農ヲ詩ニ「誰カ知ル盤中ノ飧。粒一々皆辛苦」　○淮南子曰「堯時十日並出草木焦枯堯命レ羿仰ニシテ射二十日一中レ九ニ烏皆死堕ニ羽翼ヲ一。　○六帖曰「日中有二陽烏三足ナル一。」　○韓詩ニ曰「金烏海底初飛来」○清明カ金烏玉兎ト云書有リ。　○此賦桃鏡か集・蝶夢か選にありて外に証とすへきを知らす。題名猶さたしかたし。

元禄五年

芭蕉を移辞

考に古文前集陶淵明詩ニ「採二菊東籬下一悠然トシテ見二南山ヲ一。」○蒙求曰「晋王徽之守子猷嘗寄居二空宅ノ中一便令レ種レ竹或問ニ其故一徽之嘯詠シテ指曰何可二一日無二此君一。」　○はせをみのゝ行脚元禄二年也。同四年深川へ帰る。翌五年の文にや。○山家集に「こゝを又我すみうくてうかれなは松はひとりにならんとすらん」　○杜律に「感シテハレ時花ニモ濺レ涙ヲ」○伊勢物語

に「さつきまつ花たちはなのかをかけはむかしの人の袖の香そする」　○字彙ニ云「浙江在ニ銭塘一出歙県ノ玉山ニ一因水勢曲折激ニ起潮頭ニ一故曰浙江」　○円機活法芭蕉条下ニ鳳尾書織の字対あり。○又李義山曰「芭蕉開ニ緣扇ニ」　○荘子山木篇ニ「荘子行ニ於山中ニ一見ニ大木枝葉盛ナルヲ一伐レ木者止ニ其傍一而不レ取也。問ニ其故一曰無レ所レ可レ用。荘子曰以ニ不材一得レ終ニ其年一。」　○円機活法云「唐僧懐素貧ニシテ無ニ紙可レ書。嘗種芭蕉以供ニ揮洒一。○古文真宝鈔「張載字子厚、皆称為横渠先生」○張子全書巻之十三雑詩篇ニ「芭蕉。芭蕉。心尽キテ展フニ新枝一新ニ巻テニ新心ヲ一暗ニ己随フ、願ハ学テニ新心ヲ一養ヒニ新徳ヲ一旋テ随テニ新葉ニ一起サンコトヲニ新知ヲ一。　○天和三年深川に庵をしめてはせを を植たる事枯尾花の其角か序に見えたり。さるをいつれの年にやといふ。はせをの文すへて此たくひあり。　○本朝文鑑に支考か書状有て、其中に芭蕉を移す辨といふ事あれと此文はなし。

紫　門　辞

考にはせを元禄四年東武に帰る。此秋許六に始て面を合す。此辞元禄五年なるへし。論語（三字空白）「吾少也、賤故多ニ能鄙事一君子多乎哉不レ多也。」註云「多能ハ非レ所ニ以率ヒ人、故又言君子不ニ必多能以暁之」（頭注「羅山童観抄」）　○論衡云「作ニ無益ノ之能一納ニ無補ノ之説一猶如以レ夏ニ進レ爐以レ冬ニ奏扇亦徒耳」○後鳥羽院御口伝云「釈阿はやさしくゑんに心もふかくあはれなる所もありき。殊に愚意に庶幾するすかた也。西行は面白くてしかも心にふかくあはれなるありかたく出来しかたきうたも共に相兼てみゆ」（頭注「釈阿ハ俊成ノ法号」「王僧虔曰書法ハ法心也。又曰得ニ古人之心一為」）

許六ニ離別ノ辞

考に元禄五年の韻塞に贈許六辞と題して有り。許六は彦根侯の臣、多能にほこる事かれか文筆にしらる。さるを此文に雲水の心のみをいひて古事古語のたち入なきを察へきや。

僧専吟餞別詞

考に此詞は湖東辻村大田氏梅呉家珍のよし芭蕉句選拾遺にあり。（頭注「宝暦五年井筒屋梓行干梅序」）　○綾錦に「きのふ迄目のまふ谷の若葉かな似春門釈専吟」とあり。○白氏文集失鶴詩ニ「失テ為ニ庭前雪一飛テ因ニ海上風一。九宵応レ得レ侶、三夜不レ帰レ籠、声断ニ碧雲ノ外ニ一影沈ニ明月中一郡斉従レ此後ニ、誰カ伴ッニ白頭翁ニ一。」○六祖檀経神秀偈曰「身是ニ菩提樹、心ヲ知ニ明鏡台一時々ニ勤テ払拭セヨ、勿レ使レ惹ニ塵埃ヲ一。」又慧能偈曰「菩提本無樹明鏡亦非レ台、本来無一物何処惹ッニ塵埃ヲ一。」　○はせを を深川の庵より富士箱根の山見ゆる。

納　涼　辞

考に此辞元禄五年の己か光集に有り、四年の作にや。女のや

さしかるへきはいかめしく、男のりゝしかるへきは長う着たるに、僧と老とに又若き者の桶屋かちやは法然上人の鍛冶往生番匠往生と生老病死の心もおもひ出らる。又慶長元和のころよりやことはさに浅黄帷子黒小袖と、今に人気に合ふの不可思議なる。其色に続きては小袖に御納戸茶帷子にうすかきあり。御納戸茶は古実のミル色、うすかきはクチハ色、仏家に木蘭地といひ、茶の湯者の家に遠州茶といふ。貞享元禄のころ迄茶の湯はやりしとかや、それにつれて上下ともに此色を着たるにや。さもなくは此句おもひよるましくや。去来抄に西瓜の句の説見合すへし。

上野の花見　四ツ五器のそろはぬ花見心哉

曲水亭納涼　夏の夜やくすれて明し冷し物　他人の美色糸竹を言外主人の饗応時にあへり

是におもひ合すれは花見も納涼も「景清も花見の座には七兵衛」の和らきより時と所によりて和漢古語のたち入なく、言外の風諫察すへきにや。

憐ム二捨子ヲ一辞

本朝文鑑註曰「此辞も漁父の文勢なから捨子に秋の風いかにと問かけて如何にそやと序詞につゝけたる。但し辞類の一体にして倭文に辞を云へる時は千般の法格あるへし。誠や富士川の瀬をはやみ浮世の波に云ひかけたる此川ならては更に知るまし。小萩か露は源氏の歌を借り、父母か憎愛は荘子か天姓をいへる例に和漢の博達にし、是を漢家の辞より倭文の助語を用得たるといふへし」（頭注「源氏箒木に『山かつのかきほありとも折〳〵に哀れはかけよなてしこの露』」）

考に此文野さらし紀行にありて、駿河の国の五字なく、富士川のほとりを行にと行の字あり、又いさやの三字なく、又波をしのふとあるを波をしのくとあり。又小萩かもとの秋風もの字なく小萩かもとの秋の風今宵やちるらんとつゝけたり。又汝は父ににくまれたるか母にうとまれたるかと、下の汝の字なし。又にくむにあらすと爰にけつしたるを紀行にはあらしとうたかふ。紀行は詞すみやかにして殊更感す。

栖去辞

考に此辞小文庫に有て末に「雲雀より上にやすらふ峠かな」の句あれとも、此辞に属したる句にや、決しかたし。家を放下しての二字を猶の一字也。○雲雀よりの句は貞享五年よしの紀行笈の小文に臍峠にての吟也。橘町に住たる事集にいまた見当らすといへ共、俳諧問答抄に許六曰「東武に趣く。此時翁に対面せん事を悦ふ也。橘町より深川芭蕉庵再興して入給ふ年也」とあり。其ころの文ならんには元禄四五以後の文なるへし。然らは雲雀よりの句は是によりて此句には有へからす。（頭注「自得発明弁ト号ス写本近世梓行、号問答抄」）○円機活法ニ「晋ノ阮宣以三百銭一掛二杖頭一至二酒店一便為二酣暢一」

元祿四年

小督塚辞

考に嵯峨日記に「十九日午半臨川寺に詣」と有て此文有り。○小督の局は平相国の息にて高倉天皇御寵愛なりしか、世の憚に嵯峨に隱て住しとかや。平家物語に委し。　○白氏文集に「巫女廟花紅似レ粉、照君村柳翠於眉」　○源氏蓬生に「位を去給へるかりの御よそひをも、たけのこのよのうきふしを時〳〵につけてあつかひきこえ給ふになくさめたまはん」　○古今集に「今さらに何おもひ出らん竹の子のうきふししけき世とはしらすや」（頭注「躬恒」）

同

徒然の詞

考に此辞嵯峨日記に「廿二日朝の間雨降。今日は人もなく淋しき儘にむた書して遊ふ。其言」と書て此「喪に居る者は」より書出す。　○徒然は兼好か徒然草のたくひなるへし。○日記には徒然字なく「裏に住する者は裏をあるしとす。淋しさなくはうからまし」と続けてあり。日記書写の誤にや。猶善書を待。裏とあるいかなる意にや。○山家集に「とふ人もおもひたへたる山里のさひしさなくは住うからまし」○同集に「山里にまたこは誰をよふこ鳥独のみこそすまんと思ふに」○挙白集山家記に「爰を半日とす。客は其閑なることを得れは、我は其閑なる事をうしなふ」（頭注「張籍詩ニ因過ニ竹院ニ逢レ僧語、又得浮生半日間ト云ル句ヲ仏印ニ対シテ東坡吟シケレハ、仏印曰学士ハ閑ニ了半日ニ、老僧忙ニ了半日ニ」）

貞享元

贈千李辞

考に貞享元年の野さらし紀行に「大和国に行脚して葛下郡竹の内といふ所に至る。彼チリか旧里なれは日頃とゝまりて足を休む『わた弓や琵琶になくさむ竹の奥』」とあり。　○蓬萊方丈瀛州は神仙三島。　○いくくすりは不老不死の薬也。仙家にあり。荻のしをり　○後の旅集に、貞享元年の句に「琵琶行の夜や三味線の音あられ」とあり。是は全く冬の句也。野さらし紀行チリ宅に舎りしは秋也。然るを冬知らぬも詞にて音あられも比喩なれは剱するにて秋と聞へきや。又増山井に綿・わたうつ・わたくり・わたつむと冬季也。然はわた弓の句も冬季なるや。　○綿弓やの句は「独坐幽篁裏、弾琴復長嘯」のおもむきありて、又音あられの句は白楽天か琵琶行に「大絃嘈々如急雨」とあるによれるにや。（頭注「字彙音曹、頭書ニ喧嘈」）

贈明石玄随辞

考に左伝齊ノ高強曰「三折レ肱ヲ為ニ良医ニ」（頭注「定十三」）○国語晉平公有疾秦伯使下ニ医和ニ視上レ之。文子曰、医及国家乎。対曰医七シレ国其次ハ医レ人。　○晉史劉訖対策第一、武帝問レ之。対曰臣今為ニ天下第一ニ猶ニ桂林一枝ニ。○無門関曰「世尊

昔在霊鷲山会上拈花示衆、時衆皆黙、然迦葉尊者破顔微笑。世尊云、吾有二正法眼蔵涅槃妙心実相無相微妙法門不立文字教外別伝一附二属ス摩訶迦葉ニ。」○唐書志、天宝元年詔封シテニ荘子一為二南華真人一。○荘子逍遙遊篇云「鷦鷯巣二於深林一不レ過二一枝一偃鼠飲レ河不レ過二満腹一。」○又云「今子有二大樹一患二其無用一何不下樹ウヘテ二之於無何有之郷広莫之野ニ一彷徨乎無二為ニシテ其側ニ一逍遙乎寝一中臥セ其下上」○此文いつれの年にや不詳。

煤掃の説

考に小文庫にありておそらくは元禄三年のころにや、世のさまをいふに四条の納涼の文に見合せは、同しくやすらかにして余情栄枯の観相。

閉関説

考に論語季氏篇「孔子曰君子有二三戒一少之時也血気未定、戒之在色。及其壮也、血気方剛、戒之在レ鬬ヲニ。及其老也、血気既衰、戒之在レ得。」○古今集に「梅の花匂ふ春へはくらふ山やみにもそれとしるくそありける」○新続古今集に「しられしな忍の岡のはつ草のはつかなるよりもゆる思ひを」○新古今集に「つく〳〵と思ひあかしの浦千鳥浪の枕になく〳〵そ聞」○杜律に「人生七十古来稀」○浄心誡観云「学士聰明者、挙動多軽躁有錯二解義一邪見復顛倒」○字彙「洫虚也。溝洫ハ百丈有レ洫深各八尺」○復出唐書志、天宝元年詔封荘子為二南華真人一」○蒙求「孫敬字文宝、常閉戸読書」○杜五郎は和州の隠者、維摩経一部のみを読後はそれを捨つると「雨中のとも」といふ草紙にありといふ。いまた其書を得す。○宋元通鑑に、宋の沈活杜五郎と云隠者に逢し事ありと。未詳。

貞享五
更科姨捨月之辨

考に貞享五年名護屋に逗留の時、更科紀行・笈の小文にあり。それとは違ひて此文は小文庫に出る所也。末の二句笈の小文にあると同しけれは此文も貞享五年とやせん。○袖中抄に「我心なくさめかねつさらしなやおは捨山にてる月を見て」顕昭曰「姨捨山とは信濃国にあり。としころ母のようにて養ひたてたる妻の言につきて、甥のおとこの月あかゝりける夜負ひてのほりて、更科山に捨たりけるより姨捨山といふ也」○しらゝの浜・吹上の浜、共に紀州也。姨捨に吹上といふ所あり。名につれて旅情しきりなりけるか。（頭注「万葉集ニしらゝの浜松か根の手向草万代迄にか年の経ぬらん。古今集に秋風の吹上にたてる白菊は夫かあらぬか波のよするか」）○よこをりふせるとはさよの中山四郡にふせるを言。又横折伏る山ともいふ也。萩のしほり

夢の辨

考に此文元祿四年の嵯峨日記廿八日にあり。　○杜国は三河に住す。笈の小文に「鷹一つ見付てうれしいらこ崎」とはせをの吟あり。　○元祿五年の葛の松原に「杜国はこゝろさしの男なるよし。阿叟も忌日覚申されし」とあり。　○列子周穆王第三篇の夢ニ有六候といふ所に云。「奚ヲカ謂ニ六候一。一曰正夢。二曰譏夢。（頭注「字彙譏逆也」）三曰思夢。四曰寤夢。五曰喜夢。六曰懼夢。此六者神ノ所レ交也云云。又曰陰気壯則夢ニ渉ニ大水一而恐懼ス。陽気壯則夢渉ニ大火一而燔焇ス。（頭注「燔焼也炙也焇火盛貌生陽殺陰」）陰陽俱壯則生殺。甚飽則夢与。甚飢則夢取。是以以ニ浮虚一為レ疾者則夢揚カル。以ニ沈実一為レ疾者則夢溺。籍ヲ帯ヲ寝則夢レ蛇。飛鳥喞レ髪則夢レ飛コトヲ」。○本朝文鑑に貞室の枕の記あり。註ニ「此記は世々に伝写して焉馬の誤も有へきか」となれは、睡の字脱たるやもはかられす又外にも有るか。猶可尋。（頭注「円機活法」）　○異聞集曰、「淳于棼宅南有ニ古槐一。醉テ夢ニ入ニ槐安国ニ一。見ニ国王一。王曰吾カ南柯郡屈センレ卿ヲ。為コトレ守凡二十載。后ニ使者送テ出ニ一穴一。遂ニ覚メテ因尋レハ古槐下ニ穴アリ。乃槐安国ナリ。又一穴直チニ上ニ南枝一。即南柯郡ナリ也。」　○荘子齊物論云。「昔者荘子夢為胡蝶。栩々然胡蝶也。（頭注「音義栩々喜貌」）自喩シテ（傍注「楽也」）適レ志与不レ知レ周ナルコトヲ也。俄然覚則蘧々然周也。（「頭注「音義蘧々有形貌」）不レ知周之夢為胡蝶与蝶之夢為レ周与周与胡蝶則必有ラン分矣。此レ之レヲ謂ニ物化一。」　○論語述而篇「子曰甚矣吾衰也。久矣不ニ復夢ニ見ニ周公一。」　○周礼春官六夢其中に云。「思夢平時所レ思而夢ル。孔子夢周公是也。」　○列子穆王第三篇ニ「子列子曰神遇ッテ為レ夢ト形接ハルヲ為レ事ト。故昼想夜夢ミル。神ト形トノ所ナリレ過。故神凝者想夢自消ス。信レ覚ルヲ不レ語。信レ夢不レ達。物化ノ往来スル者也。古之真人其覚自忘。其寝トキハ不レ夢。幾ント虚語哉。」　○字彙念常思也。想ハ思也。思一日レ念也。

元祿二

曠野序

考に神社考曰「支那諸書指シテ言ニ蓬萊一者於日本有ニ三所一。紀州熊野駿州富士尾州熱田」と。されは蓬左は熱田の左りなるへし。○貞享元年尾張行脚冬の日集有。春の日は翌二年選。其夏東武に帰庵也。○冬の日春の日は、たくみにて実をそこなふ所もあれは意に不叶か。その実をそこのふとは、檜林風の末延宝のころ、作をつくし漢字をあつめ、詩を聞くやうに成り、文字余りて一息にいはれぬやうに成たる。其風いまた残りたる所あれはなるへし。○「見わたせば柳桜をこきまぜて都そ春のにしきなりける」古今集（頭注「素性」）　○「あはれともうしともいはしかけろふのあるかなきかにけぬるよなれは」後撰集。○心性さたまらすといふ事（頭注「華厳五教抄」）を題にて人々よみける。「雲雀たつあら野におふるひめゆりの何につくともなき心かな」山家集。

元祿二

銀河序

考に元祿二年奥の細道に此句ありて其前文に、

酒田の余波日を重て、北陸道の雲に望、遙〳〵のおもひ胸をいたましめて、加賀の府まで百卅里と聞、鼠の関をこゆれは、越後の地に歩行を改て、越中の国一ふりの関に到る。此間九日、暑湿の労に神をなやまし、病おこりて事をしるさす。

文月や六日も常の夜には似す

荒海や佐渡によこたふ天の川

とあり、（頭注「鼠の関は越後出羽の境。一ふりは一振と書、越後と越中の境」）○勧進帳に「出雲崎にて」と前書あり。○雪丸ケに「越後国出雲崎といふ所より佐渡の嶋へ十八里となり。初秋の霧立もあへす、流石に浪も高からされは、たゝ手の上のことくに見わたさるゝ」と有りて此句あり。（頭注「師走袋」に「出雲崎より丑寅にあたりて見ゆれは七夕の夜明方には佐渡の方へよこたふ」）○よこをりふせるはさよの中山四郡にふせるを言。又横折伏（ヨコヨリフセ）るともいふ事也。○佐渡へ配流は平泰時はからひに順徳院、又後二条院御宇二条家の為兼、後醍醐帝の御宇日野資朝。（頭注「定家―為家―為教―為兼」）。

年不知

風光集序

考にいつれの頃にやしらす。元祿十七年の座神選の風光集と題せる其序に出す。座神か自序に、「先達芭蕉翁の書捨られし序文の艸ありて隠士の文庫の底より出たり。よきかな風光の題号は今に用るもはゝかりあれと、一曲あるをみつから悟たるに似たれは、古翁のおもむきにもかなひてんやと、巻のはしめに冠らしむといふ」と有り。○松の葉といへる書あり。古代三味線の濫觴より、本手組又時行唄の文句集たる元祿十三年の梓行也。其中に小六と題せる唄の文句に「小六ほつくり　ついたる竹のつえ小六もとは尺八なかはひうやりちやうやり」と有り。○元祿三年の瓢集に「小六うたひし市のかへるさ」と珍碩か句あり。○爾雅ニ春晴而風クヲ曰光風。○誹諧新式光風条下ニ「宋玉節変化光風転レ蕙。」○貞徳より宗因と変化したれは、広く見遠く聞て、古人の糟粕に酔ましく今より又変化あるへき芭蕉の言葉の種なるや。されは古式にかゝはらさる事をいふ。我家の二字にも其意知るへきか。此文俗にも通し安くて心高し。

古今誹諧序

考に支考か古今抄の再選貞享式の序也。○家語ニ云（頭注「家語巻ノ三、二十二丁」）「諫レ君有ニ五義一。一譎諫。二戇諫（頭注「戇音撞愚而直」）三降諫。四直諫。五諷諫。唯度レ主而行之。吾従ニ諷諫一ニ。」○史記滑稽伝「秦始皇二世欲漆其城優旃曰、善主上雖レ無レ言、臣固ニ将レ請レ之。漆城雖ニ於百姓愁レ

費然佳哉。漆城蕩々冦来不能上即欲ルニ就レ之易レ為レ漆耳。雖難レ為ニ蔭室一。於是二世笑レ之以其故止。」　○又漢武帝時、斉人有東方生。名ハ朔トイフ。即謂レ之曰、人皆以ニ先生一為レ狂。朔曰、如ニ朔等一所謂ル避ニ世ヲ於朝一廷ノ間ニ者也。古之人乃避ニ世ヲ於深山ノ中一。時席中ニシテ酒酣ナルトキ拋ヘテ地歌曰、陸ニ沈シテ（頭注「索隠曰司馬彪云謂無レ水而沈レ之」）於俗ニ避ニ世ヲ金馬門一。宮殿中可ニ以避世全スヒ身。何必深山之中蒿廬之下ニシモセン。

○又評林ニ魏文帝時鍾繇華歆王郎あり。（頭注「三子ハ魏ノ世之滑稽」）○仏家ニ勧善の教頓悟の禅あり。○御裳川伊勢国にあり。　西行しばらく住てみもすそ川歌合あり。○兵家者流ニ非理法権ノ常語。○十論十段聖典解ニ道厳法易ナリ。法曹ノ書ニ此等ノ類語あり。尚可レ尋ニ全文一とあり。○利世撫民は和歌十躰乃一。○春秋左氏伝（頭注「左伝昭二十年」）仲尼曰善哉政寛則民慢。慢則糾レ之以レ猛。（頭注「糾ハ摂也」）猛則民残。残則施スニレ之以レ寛。寛ルトキハ以済レ猛ヲ。猛ルトキハ以済寛。政是以和。　○大慧武庫云。覚老聞ニ東山五祖法一。経ヲ造ニ席下一ニ日室中垂問云。釈迦弥勒猶是他奴且道他是。阿誰覚云。胡張三黒李四祖其語然下略。　○小説字彙云張三李四ハ七兵衛ノ三番ムスコ八兵衛ノ四番ムスコと云に同し。

虚栗　序

考ニ李白（頭注「唐詩選掌故云、以病卒、年六十四時宝応元年也」）ハ列仙伝云。白之生ルトキ母夢長庚星入懐。因以名之。十歳通ニ詩書一。既ニ長テ隠ニ岷山一。州挙スレトモニ有道一不レ応。蘇頲為ニ益州ノ長史一。見レ白曰、是ノ子天才英特少シテ益以ヲ学不レ減ニ相如一。後至ニ長安一。謁ニ加知章一。知章見ニ其詩一歎曰、子謫仙人也。言ニ於玄宗一。召ニ見金鑾殿ニ一論当世事。奏ニ頌一篇一。帝賜食親為ニ調羮一。有レ詔ニ供奉翰林一。帝嘗坐ニ沈香亭ニ一。時牡丹盛開。欲ニ白ヲシテ為ニ楽章一速召。適白已醉ヘリ左右用レ水類ニ其面一醉稍解。帝親使下ニ貴妃一為レ之捧上レ硯。即成清平調三章筆無レ留。意帝愛ニ其才一数宴ニ見ス。白嘗醉使レ高力士脱レ靴。力士素貧シ。恥レ之。因摘其詩以激ニ貴妃一。帝欲レ官レ白ヲ妃輙沮レ之。白自知不レ為ニ親一近シテ所ヒ容。益驁一放シテ不ニ自修一。与ニ張旭等一日醉。時ニ称シテ為スニ酒中八仙一。懇求還山帝賜レ金放コルナリ還。安祿山反時永王璘辟シテレ白ヲ為ニ賓佐一。璘起レ兵敗当ニ誅ルニ一。初白游ニ并州一見ニ郭子儀一奇レ之。子儀犯法白為救テ免ス。至是子儀請解ニ官并ニ上ノ所ノレ賜銀印ヲ一以贖レ之。詔流ニ夜郎ニ一。会レ赦還ニ潯陽ニ一。坐レ事ニ下レ獄ニ時宋若愚将ニ呉ノ兵三千赴河南一過ニ潯陽一釈レ囚為ニ参謀一。未レ幾辞レ職訪ニ当塗令李陽冰一。後代宗召ス。咸謂ヲ白醉ヲ墮レ江死。

○杜甫（頭注「唐書列伝二十六本」）ハ唐詩選掌故云。杜甫字子美。襄陽人。挙ニ進士一不弟。因遊ニ長安一玄宗朝奏賦二篇。帝奇之使ニ待ニ制集賢院一。数上ニ賦頌一高シテ自ヲ称レ道。粛宗立拝ニ右拾遺ニ一。坐ニ房琯事一出為ニ華州司功一。属ニ飢乱一棄官客ニ秦州一。負レ薪採ニ稼栗一自給。流ニ落剣南一厳武表為ニ参謀検校工部員外郎一。往ニ来夔梓間一大暦中客ニ手陽一。遊ニ嶽祠一大水遽至大醉

一夕卒。五十九。集今伝。甫曠放不二自検一。好論二天下大事一。高而不レ切。数嘗遭二寇乱一挺レ節無レ所レ汚。為歌詩傷レ時撓レ弱情不レ忘レ君。人憐二其忠一。

○按るに李杜共に老仏により淵明をしたふにや。

○李白ハ古文真宝春夜ニ宴スルニ桃李園ニ一序李白「夫レ天地ハ者万物ノ之逆旅ナリ。光陰ハ百代ノ之過客ナリ。而シテ浮生ハ若シレ夢ノ為レ歓ヒヲ幾何ソヤ。古一人秉テレ燭ヲ夜ル遊フ。良ニ有リレ以也。況ンヤ陽春召スニレ我ヲ以シテ二煙景ヲ一大一塊仮レ我ニ以スニ文章ヲ一。

○荘子知北遊篇曰。悲ニ夫ノ世人直一為二物逆旅一耳。注云。逆旅客舎也。○金剛経云。如夢幻泡影。○荘子太宗師篇云。大塊載我以形。労レ我以レ生。佚レ我以レ老。息レ我以レ死。注云大塊ハ天地也。

○古文前集戯ニ贈二鄭溧陽ニ一。李白陶令日々醉フ。不スレ知ニ五柳ノ春ヲ一素琴本ト無レ弦。漉レ酒用二葛巾ヲ一。清風北窓下ト。自謂羲皇ノ人。何ノ時カ到二栗里ニ一。一ツニ見ン二平生ノ親ヲ一。

○注去太白謂ラク幾ク時カ得テ到ルコトヲ二鄭公ノ所一居一之栗里ニ一。一ツニ見ム二平生契一旧ノ之親ヲ一。又云太白高一尚ニス其ノ志ヲ一。自二得シテ酒中ノ之趣ヲ一笑ニ敖ス流一俗一。自以ニ淵明ヲ一比一方ス也。

○分類補注李太白詩僧伽歌ニ「真一僧法一号号二僧伽一。有時与レ我論ニ三車レ。問一言誦呪一幾千徧。口道恒一河沙復沙。此僧本往二南天竺一ニ。為レ法頭陀来二此国一ニ。戒メ得リ長天秋月ノ明。心ハ如二世上ノ青蓮ノ色一。意清浄貌稜々。亦不レ減亦不増。瓶裏千年鉄柱骨。手中万歳胡孫藤。嗟予落二魄スルコト江淮一ニ久。罕過真僧ノ説一空有ヲ。一言儼尽波羅夷。再礼渾除犯コトヲ二軽垢ヲ一。」

○註云僧伽大師ハ西域人也。姓何氏。唐竜朔初来ル。中略唐高宗時至二長安洛陽一行化ス。中略二年中宗遣レ使迎二大師一。至テ二輦轂ニ一深加レ礼命シテ住セシム二大薦福寺一。帝及百官咸稱二弟子ト一。中略三月三日大師示滅。○三車者羊車鹿車牛車也。義見妙法蓮花経引レ喩云。○維摩経宝積偈曰。目浄修広如二青蓮一。心浄已二度二諸禅定一。○胡孫藤乃藤枝手所執者。心経曰。是諸法空相ニシテ不生不滅不垢不浄不増不減。○落魄ハ落託義同泊薄通シ用ユ。（頭注「仏祖統記巻四涅槃経云、仏告二大衆一今以二正法一附二属国王大臣四部ノ衆ニ一応下当勧厳諸学人令中レ得中増上戒定慧上。若有下不学是三品法懈怠破戒毀正法者上大臣四部衆応二当苦二治一。」）

○又同書ニ答二湖州ノ迦葉司馬カ問ニ二白是何人一ト。青蓮居士謫仙人。酒肆蔵名三十春湖州ノ司馬何ソ須シレ問コトヲ金粟如来是後身。

○註云青蓮居士太白自号也。唐志ニ上州別駕長史司馬各一人発迹経曰浄名大士是古今粟如来。（頭注「居士ハ事苑ニ云凡具二四徳一乃称二居士一ト。一ニ不レ求二仕官一。二ニ寡レ欲蘊レ徳。三居レ賊ニ大富。四守道自悟ル。又菩薩行経云。有居財之士。居家之士。居法之士。居朝居山之士。通称二居士一也。」）

○又同書遊化城寺詩ノ中ニ「雖レ遊二道林室一一亦挙二陶潛杯一」ノ句アリ。ソノ註ニ「是暗ニ用下淵明カ嗜レ酒与二遠公一遊事ヲ上。」

○又同書宴二興徳寺ノ南閣ニ一ノ詩ノ中ニ「恭シテ陪二竹林宴ニ一留レ

醉ヲ与ニス陶公トニ」ノ句アリ。ソノ註ニ「王戎与ニ阮籍一為ニ竹林ノ之遊ヲ一陶潛嗜レ酒。」

○又同書奉レ餞シ下高尊師如貴道士伝ニ道録一畢テ帰ルニ中北海ニ上「道ハ隠不レ可レ見。霊書蔵ニ洞天一。吾師四万劫。歴世遞相伝フ。別杖留ニ青竹一。行歌躡ニ紫烟一。離心無ニ遠近一。長在玉京懸。」

○註云「神仙伝ニ壺公取テ一青竹枝ヲ一与フニ長房一。」○古白鴻ノ頌ニ「茲亦耿々トシテ矯ニ翮ヲ紫烟ニ。」○老子云「道隠ハ無レ名。」○記礼運曰「今大道既隠天下為レ家。」

○杜律集解宿府「清秋幕府井梧寒。独宿江城蠟炬残。永夜角声悲自語。中天月色好誰看。風塵荏苒音書絶。関塞蕭条行路難。已忍伶俜十年事。強テ移ニ棲息一枝ノ安。」

解云幕府ハ参謀府事。○心口独念故曰ニ自語一。○厳表レ公為ニ参謀一而トモ非ニ其志一因宿ニ幕府一。発レ之自語トハ無ニ人共語一也。梧寒秋暮ル矣。炬残ハ夜闌矣。聞ニ角声ノ之悲一而惟自語ル対ニ月色之好一。誰与同謂ニ乱離一。○以ニ所ハ不レ楽者兵戈侵尋而郷書断絶。道路阻梗而故郷難レ帰。自華州棄レ官独行十年。自茄苦乃強就ニ幕府ノ一官一。如鷦鷯安一枝誰久鬱々乎。（頭注「荘子逍遙遊篇云、鷦鷯巣於深林不過一枝」）（頭注「荘子逍遙遊篇云、鷦鷯巣於深林不過一枝」）

○同書謾成「野日荒々白。春流泯々清。渚浦随地有。村逕逐門成。只作披衣慣。常ニ従ニ漉酒生一。眼辺無ニ俗物一。多病也身軽。」

解云「尽ニ鄰曲横斜一家一径之意一。」○披衣荘子事。漉酒淵明事。○江皐村居景物幽雅而起居自ラ適ス。故雖ニ多病ニ而体力モ亦軽シ。

○同書徐歩「整履歩ニ青蕪一。荒庭日欲レ晡ント。芹泥随ニ燕觜一。花蘂上ニ蜂鬚一。抱レ酒従ニ衣ノ湿フ一。吟レ詩信ニ杖ノ扶ク一。敢論センヤニ才見ヒ忌。実有醉如愚。」

解云「上四句是徐歩処ト与レ時及所レ見者。下四句言把レ酒吟レ詩不ニ敢テ論ニ才之見ル、コトヲヒ忌。実醉如レ愚以避レ之。」（頭注「孝子経二十章云。衆人皆有レ余而我独若レ遺。我ハ愚人之心也哉。論語陽貨篇古之愚也直也今之愚也詐而已矣」）

○唐詩選排律杜甫「冬日洛城ノ北謁ス玄元皇帝ノ廟ニ一廟ニ有リニ呉道士カ画ケル五聖ノ図一。配シテレ極ニ玄都闕ス。憑レ高ニ禁御長シ。守祧厳ニ具礼一。掌節鎮ス非常ヲ一。碧瓦初寒ノ外。金茎一気ノ旁。山河扶ケニ繡戸ヲ一。日月近シニ雕梁一。仙李盤根大ニ。猗蘭奕葉光ル。世家遺シニ旧史一。道徳付スニ今王一。画手看ニ先輩一。呉生遠ク擅場。森羅移シニ地軸ヲ一。妙絶動スニ宮墻ヲ一。五聖聯ネニ竜衮ヲ一。千官列ニ雁行ヲ一。冕旒俱ニ秀発。旌旆尽ク飛揚。翠柏深ク留メレ景ヲ。紅梨迥ニ得レ霜ヲ。風箏吹キニ玉柱ヲ一。露井凍ニルル銀床ニ一。身退テ昇シ周室ニ一。経伝テ拱セシムニ漢皇ニ一。谷神如シ不ンハレ死セ。養テレ拙ノ更ニ何ノ郷ソ。」

○掌故云「鋼鑑曰高宗乾封元年車駕至ニ亳州一尊ニ老子一為ニ太上玄元皇帝一。天宝初老子降ニ於丹鳳門ノ之通衢ニ一告ニ賜霊府在ニ尹喜故宅一。上遣レ使得レ之。乃置ニ玄元ノ廟於天寧坊一追ニ尊聖祖大道玄元皇帝一。仍詔ニ州郡一立ニ紫極宮一画レ

像事レ之。廟古今注廟者貌也。所以髣髴先人之霊貌也。」○朱景名録曰「呉道玄字道子。少孤貧。天授之性未二弱冠一窮二丹青之妙一。見子世説。」○五聖高祖・太宗・中宗・高宗・睿宗也。列二画老子左右一。天宝中加二大聖皇帝之号一。○配ハレ極二配二天之北極一也。廟ハ在二洛城北一。故云レ爾。○玄都閟ハ玄都丹台仙真之所見詳解閟ハ深閉也。○禁御ハ漢書音義禁御者禁苑之御。折レ竹以懸レ繩連レ之使レ人不レ得二往来一。○守祧ハ周礼二分官守レ祧。注遠廟曰レ祧。遷主之所レ蔵也。○掌節周礼地官掌節。注節猶レ信也。（頭注「掌」）○一気文選西征賦化一気而甄二三才一。（頭注「甄」）○仙李史記注玄妙内篇曰「李母懐胎八十一載。逍二遙李樹下一迺割左腋而生。」又索隠曰「按葛玄曰李氏女所レ生因二母姓一也。」又曰「生而指二李樹一。因以為姓而唐李姓故以仙李尊二称之一。○猗蘭前漢景帝后夢二日入ヒ懐七月七日生二武帝於猗蘭殿一。○奕葉猶二累世一也。○世家史記置二老子於列伝一唐以李姓。故作二世家一。○今王指二玄宗一。嘗親注二道徳経一。○擅場字見二東京賦一。（頭注「字彙擅ハ自専ニスル也。称二呉子画一」）○竜衮天子衣裳十二章其一竜天子之竜一升一降竜首巻然。故謂二之ヲ衮一。見二書益稷一。○鴈行毛詩西鄰鴈行。又見礼記。（頭注「画官人ノ席順ニ曰二雁行一」）○冕旒礼記「天子冕有二十二旒一。○風箏簷鈴也。古人殿閣簷稜間有二風琴風箏一。○銀床井闌也。古舞歌後園鑿レ井銀作レ牀金瓶素綆汲二寒漿一。○身退史記老子周守二蔵室一之史也。居周久之見周之衰廼遂去。○漢皇謂漢文帝。伝二老子経ヲ於河上公一。故曰レ拱。拱者而師事之也。○谷神老子二谷神不死王注谷神谷中央無谷也。○杜律集解二謁二真諦寺禪師一「蘭若山高処。煙霞嶂幾重。凍泉依二細石一。晴雪落二長松一。問レ法看詩妄。観シテレ身向レ酒慵。未レ能レ割二妻子一。卜レ宅近二前峰一。

解云「千家註曰如下周顒長於仏理在鍾山西丘ノ隠舎終日長蔬雖有妻而独処上焉。此於卜レ宅近レ寺可レ為二杜公証一也。

（頭注「接維摩居士之意」）

○唐詩選掌故題二玄武禪師屋壁一杜甫「何レノ年カ顧虎頭。満壁画二滄州ヲ一。赤日石林ノ気。青天江海ノ流。錫飛テ常ニ近レ鶴ニ。杯度テ不レ驚レ鷗ヲ。似下得テ二廬山ノ路ヲ一。真ニ従テ二恵遠ニ一遊上。○晋顧愷之小字虎頭。善丹青。○滄州在海中仙境也。（頭注「趙註二日此満壁之滄州疑ハ即顧愷之所画」）○飛錫高僧伝梁僧誌公与二白鶴道人一並欲居舒州潛山。道人以二鶴止一処ヲ為レ記。誌公以二卓錫処一為レ記。已而鶴先飛去至レ麓将レ止。忽聞空中飛錫声。誌公之錫遂卓於山麓名以二識処一築室焉。○杯渡ハ高僧伝杯渡者不知其姓名。嘗浮二木杯ヲ一渡レ河。因名二渡杯師一。趙註云「陶淵与遠公遊此レ言図中似可得廬山之路。可以真従遠法師遊也。□統紀曰「遠公嘗謂諸教三昧其名甚衆シ。功高シテ易ハレ進二念仏為レ先。既而謹律息心之士絶塵清信之賓。不シテレ期至彗永彗持等結レ社念仏ス。世号二十八賢一。復率テレ衆至二百二十三

人。同修二浄土之業一造二西方三聖像一建レ斎立レ誓。

○寒山子詩集序曰「寒山子者不レ知二何許人一。自古老見レ之皆謂貧人風狂之士。隠二居天台唐興県一、西七十里一。号シテ為二寒厳一。毎二於テ二茲地一。時還二国清寺一。寺ニ有二拾得トイフヒト一。知二食堂一。尋常収二余残ノ菜滓シテ於竹筒内一。寒山若来即負而去。或長廊徐行叫ヒ喚テ快活独笑。時逐ヒ捉ヘテ罵打。趨ヨフセキハ乃駐立拊掌呵々大笑。良久去旦状如二貧子一。形貌枯悴一言一話理合二其意一。」

○寒山詩云「可笑寒山道。而無車馬蹤。聯谿難記曲。疊嶂不レ知レ重ナルコトヲ。泣露千般草。吟風一様松。此時迷径処。形問影何従ヨリカスル。」○西行ハ隠逸伝云「西行者武衛校尉康清子秀郷九世孫也。俗訳憲清。少而読書習管弦。最精二弓馬一。特トニ達二和歌一。嘗出奥州仕天仁上皇。毎応制獻二和歌一。恩過日ニ渥アツシ。西行素有下出ノ二樊籠一之志上。保延三年終ニ遂レ志。自レ此周一二遊天下一。西行嘗曰「和歌者禅定之修行也。」又曰「我由二和歌一得二仏法一。」○西行上人談抄曰「歌の事を談すとても其ひまには一生いくはくならす来世なきにありといふ文を行往坐臥の口すさひにいはれし」○山家集に「野にたてる枝なき木にもおとりける後の世しらぬ人の心は」。○「夢さむる鐘のひゝきに打そへて十度の御名をとなへつるかな」。○「にしへ行月をやよそに思ふらん心にいらぬ人のためには」。○「西をまつ心に藤をかけてこそその紫の雲をおもはめ」。

○円光大師御伝云「聖道門の修行は智恵をきはめて生死をはなれ、浄土門の修行は愚癡にかへりて極楽にむまるゝ知るへし。」（頭注「維摩経曰雖諸仏国土及与衆生空而常修浄土」）○同一枚起請文に「たとひ一代の法を能々学すとも、一文不知の愚鈍の身になして、尼入道の無智のともがらに同して、智者のふるまひをせすして、只一向に念仏すへし」。○蒙求云「西施越女所謂西子也。有二絶世之美一。」○小紫は東武の遊女、美人のきこへあり。○白氏文集云（頭注「巻之三諷論篇五丁」）「上陽人紅顔閣ニ老白髪新緑衣ノ監使守二宮門一。一閉シテ二上陽ニ一多少ノ春。玄宗未歳初選ハレ入テ入時ハ十六今六十。同時采択百余人。零落年深残二此身一。」○註云「天宝五載已後楊遺妃専レ寵後宮ノ人無二復進幸ラル一矣。六宮有美色。輙置二別所一。上陽是其一也。貞元中尚存。」

○古今集序「おとこ女の中をもやはらけ、たけきものゝふの心をもなくさむるは歌也。」○万葉集「たらちねの母のこふこのまゆともりこもれる妹を見るよしもかな。」○古文前集楽天カ長恨歌云「漢一皇重レ色ヲ思二傾国ヲ一。御宇多年求不レ得。楊家ニ有レ女初テ長成ヒトトナレリ。養在深閨人未レ識。天生麗質難二自ラ棄一。一朝選在二君王側一。回レ頭一笑百媚生ル。六宮粉黛無顔色。」云云。」又云「宛転蛾眉馬前死云云。」

○註白「玄宗幸シタマヘリ レ蜀。次ス二馬嵬駅一。将士飢一疲ル。皆ナ憤リ怒ル。以テ二禍由レルヲ一楊国忠一。欲シテ誅レ之以レ槍掲ケ二国一忠カ之首ヲ於駅門一。并テ殺ス二秦国韓国号国三夫人ヲ一。土聞ニ喧譁一出レ門ニ慰ネギラフ労軍士ヲ一不レ応。上遣シテ二高力士ヲ一問レ之。陳玄礼対テ一曰。禍ノ本ト尚ヲ在リ。願ハ陛下刮サキレ恩正シレ

法。上曰。貴妃常ニ居レリ二深宮ニ一。安ソ知二国忠反謀ヲ一。力士曰。貴妃ハ誠ニ無レ罪。然レトモ将士已ニ殺二国忠ヲ一。而モ貴妃在二陛下ノ左右ニ一。豈ニ敢テ自安セン。願ハ陛下審思タマヒラカニ(タマハ)レ之。将安陛下安矣(ヤスカリナントイマシ)。上乃命シテ二力士ニ一引テ二貴妃ヲ於仏堂ニ一縊ニ殺シテ之ヲ一。輿レ尸ヲ置キ二駅庭ニ一。令シテ下ニ玄礼等一観上レ之。玄礼等乃免レ冑謝レ罪呼二万歳ト一。始テ整二部伍一為セリ二行一計ヲ一。

○漢武帝時汾陰巫錦為レ民祠二后土ノ営旁ヲ一。見レ地如二鉤状一。接視レハ得レ鼎。以レ礼迎レ鼎至二甘泉一。従テ上一行シテ薦レ之至二中山一。晏温有二黄雲一。蓋焉。至公卿大夫議謂二之ヲ宝鼎一。（頭注「円機活法」）○晋雷煥初呉未レ滅也。斗牛之間常有紫気。張華問二雷煥一。煥曰宝剣之精上徹於天耳。華即補レ煥為豊城令。煥拙獄屋基得一石函中有二宝剣二一。並刻題一曰二竜泉一。一曰太阿。

○延宝九年の次韻に

鷺の足雉脛長く継添て　桃青
這ノ句以荘子可見矣　其角

とあり。越人か不猫蚊に「当流開基の次韻」といふ。又一晶か八衆県隔といふ書に「松尾桃青天和の頃荘子の寓言に遊ひ語路を禅話の厳なるによる。渠レ魁(サキカケ)なるへし」といふ。○此虚栗は天和三年にして、桃青か俳諧の心をあらはしたる始也。されは此跋くわしく見るへきにや。

延宝六年

十八番句合跋

考に源氏はゝきゝの巻に「ともかくもおもふへきふしあらんを、のとやかに見しのはんより外にますことあるましかりけりといひて、（傍注「湖月抄ニ中将詞、葵の上の心むけにかなひ侍り」）我いもうとの姫君はこのさためにがなひ給へりと思へは、君（傍注「源氏」）のうちねふりてことはませ給ぬをさうゝしく心やましと思。（傍注「中将」）馬のかみものさためのはかせになりてひゝらきゐたり」とあり。此巻に女を上ミ中カ下モの品にさためいふ。○ひゝらきは湖月抄に「鳥の羽をふるひたるやうにほこりたる躰なり。」

常磐屋句合跋

考ニ文体明弁曰「按宋厳羽云風雅頌既亡テ一変而為離騒。再変而為西漢五言。三変而為歌行雑体。」

○耳底記云「人丸・定家・実隆此衆の風躰なにやらにかはりもてきたるそ。答時代のかはりはあるへきといへとも皆同しものなるへし。あの衆のは皆おなしもの也。」○古今集の序に「松の葉の散うせすして、まさきのかつらなかくつたはりとりのあと久しくとゝまれらは、歌のさまをもしり、ことの心をえたらん人は、おほそらの月を見るかことくに、いにしへをあふきいまをこひさらめかも。」

考に綾錦に「貞徳門未得。未得門不卜。岡村氏。一柳軒。東武堀江町に住す。延宝六年江戸広小路集、同七年向岡集を選す。　○陶淵明全集ニ「採菊東籬下。悠然見南山。」　○古文真宝愛蓮説「周茂叔云。晋陶淵明独愛ス菊。自ニ李唐一来タ世ノ人甚愛スニ牡一丹。」　○楽にゑらるゝ書の由を盗。○荘子胠箧篇云「滅ニ文章一散ニ五采一膠離朱目而天下始人含其明矣。」　○削曽史之行鉗ニ楊墨之口一、攘ニ棄シ仁義一而天下之徳始テ玄同ス矣。

伊勢紀行の跋

考に貞享二年の新山家集に「其角曰、花洛に浜川自悦といふあり。東行の頃彼和尚にまみえて、かりそめなから法のはしくれを得たり。予去年京にありて、共に寒山の笑をとけぬ」とあれは、貞享元年其角上京の事あり。　○貞享四年の続虚栗集に「兄去来に供して伊勢へ詣ける道すから、初旅の心を伊勢までのよき道つれや今朝の雁・女千子」とあり。然は此紀行貞享二三の間なるへし。此跋も其頃ならん。千子は元禄のはしめ卒す。　○能因法師「みやこをは霞と共に出しかと秋風そふく白川の関」後拾遺。○古き連歌に「物の名も所によりてかはりけり」といふに、「難波のあしは伊勢の浜荻」と附句あり。

十八楼記

考に笈日記に、此記の末に「貞享五年仲夏」とあり。賀嶋氏は落梧といふ。　○杜律に「白砂翠竹河村暮。相送柴門月色新。」　○瀟湘八景ハ山市晴嵐・漁村落照・江天暮雪・煙寺晩鐘・平砂落雁・遠浦皈帆・瀟湘夜雨・洞庭秋月。　○西湖十景、平湖秋月・蘇堤春暁・断橋残雪・雷峰落照・南屏暁鐘・麴院風荷・花港観魚・柳浪聞鶯・三潭印月・両峰揺雲。

伊賀国新大仏記

考に小文庫に此文ありて、笈の小文紀行の中より出たるとは見えなから、其文紀行より長し。　○俊乗房重源上人大仏建立の事。東鑑に曰「建久六年三月今日東大寺供養也。」とあり。法皇俊乗房にみことのりありて建立せしなり。其後伊賀の国にも大仏建立せしなるへし。○法園珠林ニ「釈迦丈一丈六尺。」　○扶木抄ニ「むかし見し妹かきねはあれにけりつはなましりのすみれのみして・公実」。

壺碑文之記

考に奥の細道より切出したるにて、「泪も落る斗なり」とあるを「落るはかりになん」と替りしまて也。注菅菰抄にくわし。

紙衾記

和漢文操註曰「長恨歌翡翠衾寒誰与共セン云云。」唐詩解に「旧キ

衾故枕に作れり。　○文選ノ詩文綵双〻ル鴛鴦裁為ニ合歓被一。
○白氏文集「三五夜中新月色。二千里外故人心。」　○新古今ニ「きり〳〵す鳴や霜夜のさむしろに衣かたしきひとりかもねん。」　○評曰「此記は元禄のはしめ奥羽の行脚に、三越より美濃をへて、伊勢の遷宮に詣給ふ時也。さるは如行か門人に竹戸といふ者ありて、其衾に此記を得て、今も其家の宝とす。路通も越人も其記をかきて、竹戸か幸をうらやまれけるとそ。爰に二老の文を略せり。○考に猿蓑集に、翁行脚の古き衾をあたへらるゝ記あり。略之。「首出してはつ雪見はや此衾美濃竹戸。」題竹戸之衾「たゝみめは我手のあとそ紙衾曽良。」

幻住庵之記

考に和漢文操には賦とあり。其文ともちかふ。

幻住庵賦

五十年やゝちかき身は、苦桃の老木となりて、蝸牛のからをうしなひ、蓑虫のみのをはなれて、行衛なき風雲にさまよふ。かの宗鑑かはたこを朝夕になし、能因か頭陀の袋をさくりて、松島しら川に面をこかし、湯殿の御山に袂をぬらす。猶うたふなくそとの浜辺よりゑそかちしまを見やらんまてと、しきりに思ひ立侍るを、同行曽良なにかしといふもの、多病いふかしなと、袖をひかゆるに心だゆみて、象潟といふ所より越後の方におもむく。さるは高砂子のあゆみくるしき北海のあら磯にきひすを破りて、ことし湖水のほとりにたゝよふ。鳰の浮巣の流とゝまるへき芦の一葉のやとりをもとむるに、其名を幻住庵といひ、其山を国分山（コクホ）といへり、古き御社のたゝせたまへは、六根をのつから清ふして塵なき心地なんせらる。かの住すてし草の戸は、勇士菅沼氏曲水子の伯父なる人の此世をいとひし跡とかや。ぬしは八とせはかりのむかしになりて、棲はまほろしのちまたに残せり。誠に知覚迷倒も皆たゝ幻の一字に帰して、無常迅速のことはりいさゝかも忘るへき道にあらす。山はさすかに深からす。人家よき程にへたゝり、石山を前にあてゝ岩間山のしりへにたてり。南薫高く峯よりおろし、北風はるかに海をひたして凉し。折しも卯月のはしめなれば、つゝし咲残り山ふし松にかゝりて、時鳥しは〳〵過るほと、宿かし鳥の便さへあるに、木つゝきのつゝくともいてし、かつこ鳥我をさひしからせよなと、ひとりよろこひそゝろにたのしみて、呉楚東南のなかめにはちす。五湖三江もこゝに疑しきや。日枝の山・ひらの高根より辛崎の松は霞こめて、膳所の城は木の間にかゝやき、勢田の橋に雨晴ては粟津の松原に夕日を残す。三上山はふしの俤（タナカミ）にかよひて、むさし野の古きすみかも思ひ出られ、田上山に古人をしたふ。さゝほか嶽・千丈か峯・はかまこしといふ山あり。笠とり山に笠はなくて、黒津の里人の色や

黒かりけん。猶はた眺望くまなからんと、後の峯にはひのほり、松の棚つくり藁の円座を敷て是を猿の腰かけと名つく。つたへ聞ぬ除老か海棠巣の飲楽も市にありてかまひすしく、王道人か主薄峯の住ゐも爰を捨てうらやむへからす。虚無に眼をひらいて嘯き、孱顔にしらみを捫て坐す。たま〳〵心すこやかなる時は、薪をひろひ清水をむすふ。小柴朶ひとつはみとりをつたふ。とく〳〵の雫をわひては一爐のそなへいと軽し。前に住ける人もさすかに心高く、たくみをける物数寄もなし。持仏一間をへたてゝよるの物かゝらふへき所なといさゝかしつらへり。さるを高良山の僧正洛にのほり居給ひしを、ある人をして額をこふ。いとやすらかに筆をとりて、幻住庵の三字をおくらる。其裏には予か名を書て後見ん人の記念ともなれと也。山居といひ旅寝といひ、させるうつは物たくはふへきにもあらす。木曽の檜笠・越の菅蓑はかり枕の上の柱にかけたり。昼は宮守の翁・麓の里人なと入きたりて、ゐのしゝの稲くひあらし、兎のまめ畑にかよふなと、我聞しらぬ咄に日を暮し、かつはとふらふ人も夜坐しつかにして影をともなひ、罔両に対しては是非をこらす。かくいへはとてひたふるに閑寂をこのみ、山野に路をかくさんとにもあらす。病身やゝ人にうみて世をいとひし人に似たり。何そや法をも修せす、俗をもつとめす、いと若き時よりよこさまにすける事侍りて、しはらく生涯のはかりことゝさへなれば、終に此筋につなかれて無能無才を恥るのみ。労して功むなしく、魂つかれ眉をしはめて、秋も半に過行まゝ、風景朝暮の変化とても、又たゝまほろしの住居ならすやと、やかて此文をとゝめて立さりぬ。

文操註曰△宗鑑法師は山崎に住て門前の旅籠屋に往て旅人のことく朝夕を喰けるとそ。宝寺の下に旧跡あり。△能因法師は白河の秀歌あり。挙るに及す。　○祖翁の奥の細道に「かたられぬ湯殿にぬらす袂かな」。△謡物に「みちのくのそとの浜なるよふこ鳥なくなる声はうたふやすかた」とあり。抄には善知鳥とかけり。　△知覚と迷倒は仏書に迷悟の二なり。　△生死事大無常迅速の八字は叢林に巡照の誡なり。巡照とは夜巡なり。　○西行の歌宿かし鳥とあり。全文を失す。　○祖翁の発句ニ「うき我を淋しからせよかんこ鳥。」杜詩に「呉楚東南割乾坤日夜浮。」按するに、此二句は猿蓑集の彼記にも魂呉楚東南にはしり、身は瀟湘洞庭にたつ」とあり。然るを遺稿の夜話に仮名真名の配を評するとて、故翁の夜話を挙て「我嘗て幻住庵の記に、魂呉楚と続けたるは一生の不案なり。魂は呉楚といひ、身は瀟湘と云へきに、何とて手爾波を失けん」と返す〳〵も悔み給へり。此故に文賦にも是を第四のケ条と成せり。此等に文言の返ると返らさるにて、和漢の差別を知へしとそ。誠に恐へき

は遺文の撰論なり。　△笠取山と黒津の里は記と賦との口評あり。彼記には前に景物を書続けて、笠とりにかよふ木こりの声、ふもとの小田に早苗とる歌といひて、後には名所を続けて、黒津の里いとくらふしけりてとあり。此等に花実の二用を知へしと例の遺稿に夜話あり。其外一篇の花と実也。彼記と此賦を見合すへし。　△山谷詩集に「徐老ヵ海棠巣上王翁主簿峯庵云云」二隠者の事は其註に委し。挙るに及す。（頭注「注ニ曰。徐佺楽レ道ヲ隠楽肆中ニ。家有ニ海棠数株ニ。結ニ巣其ノ上ニ一時与客飲ニ其間ニ一。王道人参禅四方帰結屋主簿峯上。嘗有ニ毛人至ニ其間ニ一問レ道ヲ」）

○西行の歌に「とく〳〵と落る岩間の苔清水くみほす程もなき住居かな。」　△高良山は筑紫にあり。僧正は加茂の甲斐か厳子なりと額の裏書にあり。　△荘子に「罔両問ヒテレ景云云。」註ニ「影辺之淡薄ナル者ナリ。」

○評ニ云「祖翁に幻住菴の文は三通ありて、始の一通は落柿舎にあり。中の一通は此賦也。終の一通は猿簑集に出て世にしれる幻住庵記也。されは此文に三通の子細は始のは文章の無用をすくり、中のは文章の花美をそろへ、終のは文章の花実をとゝなふ。道に三思の親切をたふとむへし。誠に此賦の花やかなる、彼の記にはまさりておもしろきに、是を捨て彼を取れる百世の師道をあふかさらんや。しかるに三通の口評にも花実の論は更にして記と賦との両説あり。猿簑に出せる一通は序文より全く記の躰にして幻住菴の風土をあらはし、今の一通は尤賦の躰にして、眼前の景を演なから幻住の二字の観相をつくせる例の風陳ならすやと、獅子庵の遺稿に此夜話あり。或は其稿の五秘の中に故翁の遺文を評するとて、「此ころ我門の文集に、松嶋賦のことき文章の中の大事といふへく、戦場の文も、銀河序も、（頭注「風俗文選出せる銀河序は奥の細道に無し。」）壺碑の結なき、いつれも奥の細道より首尾を略して裁入たれは、紀行は前書の法に似て記賦の躰をつくすへきにあらす。もしや其集のかさりとてそれらの文章を裁入れは、そこに其子細を断るへし。先賢をあかむる法なり」とそ。誠に道〳〵の興廃は門人の選集によれりとは、儒書仏経の公論なるをや。こゝに畢鉢羅（セツハラ）の閉戸を察すへし。但し三通の標号に、始のは杖銭子とあり、中のは風羅坊とありて、終のは芭蕉庵とあり。文に曲節地の三別なるにや。杖銭も風羅も例の狂名ならん。爰におもへは、泊船集に祖翁の遺詠の混雑せる今さら往ン事をとかむるにかひなし。誠に難波の遺状に文章の反故は武陵に在なから、我師の黙検にまかせ給へる道の大任をおそるへくは猶はたおそるへきは遺稿の評なるへし。

考るに去来に伝ふる一通いまた得す。予か知己難波にしはらく居住の折に、野坡門葉播州の何某か持つたふ幻住菴記を写して予に贈らる。

幻住菴記

石山の奥いはまの後に山有。国分山といふ。昔国分寺の名を伝ふなるへし。ふもとにほそき流涼しく、しけみを分入坂の間三曲りのほる事一丁余。半はに過て八幡宮たゝせ給ふ。社いとかみさひたり。其傍に住捨し草の戸のやねくさり壁落て、松躑躅軒を囲み、すゝき根笹庭を閉て、狐狸の足跡のみほのかなり。名を幻住庵といふ。是は勇士菅沼氏曲水の何かしの伯父の僧の世をいとひし跡とかや。ぬしは八とせはかり昔になりて、栖は幻のちまたに残せり。さるを我為に漏をとめ、垣根結添へなんとして、四国に趣んとするをとゝめらる。去年は松島ささかたに色をくろうし、北海のあらいそにきひすをやふりて、今年湖水のほとりにたゝえふ。鳰の浮巣のなかれとゝまる時節もあれはにや、卯月の初いとかりそめにいりしやまの、頓ていてしとさへおもひそみぬ。まことに清陰翠微の佳（傍書「処」）境、湖水北に堪て、比えの山・比良の高根より、海の四面みな名高き処〳〵、筆の力たらされはつくさす。唯長松のもとに足を投出し、青山に虱をひねつて坐す。猶くまなきなかめにあかてうしろの峯に這登り、松を伐て棚となし、藤かつらをもてからけまとひ、藁の円坐を敷て猿の腰懸と名付。眼界胸次驚はかり、岳陽樓に乾坤日夜をほとり、商山にのほつて魯国をあなつる。若狭の境・いせの山・美濃地はる〳〵と見やりて、伊吹か嵩天をさそふ。近くは膳所の城・辛崎の松は絵にかけるか如し。勢田の橋はなみ木のすゑにかけわたされて夕照を待。笹保か嶽は田上につゝきて、千丈か峯袴腰なといふ山有。雪かゝる山や座頭のはかまこしと古き句に聞侍りしを常はおかしくもなかりけるに、もし此山に望て言出けるにやとそ。三上山は士峯のおもかけにかよひて、むさし野の旧庵もおもひ出さるにはあらす。日に涼み月に腰懸、且は柴拾ときの休らひともなしぬ。谷に冷水ありて岩の間より流出る（「る」の左見せ消ち）其かみもし（「もし」の左に見せ消ち）此水にちきりて、神の御影やうつし初けん。極熱の日照にもたゆる事なし。小歯朶・一つ葉のみとりを伝ふとく〳〵の雫を侘て、一炉の備へいとかろし。すへて庵のたくみ何の物数寄もなく（「なく」を見せけちにして「たくます」と左側に朱書す）仏壇一間をとりてものこふ処障子もて隔たるのみなり。このたひ筑紫にきこふ高良山の僧正洛にのほり給ふを、ある人をして額を乞。いとすみやかに筆をとりて幻住庵の三字を送らる。其裏に我か名を書て後住人の記念ともなれとなり。山居といひ、旅寝といひ、させる器たくはふへくもあらすなん侍れは、木曽の檜笠・越の菅簑はかり枕上の柱に掛たり。昼は里の年寄・神主なと来りて水汲茶を煮る程の力をくはふ。あるは稀〳〵訪ふ人々も侍しに、夜坐物静にして、三声のあくひはゝかる事

なく、灯をかゝけては、景を伴ひ罔両に是非をこらす。我しゐて閑寂を好としなけれと、病身人に倦て世をいとひし人に似たり。いかにそや法をも修せす、俗をもつとめす、仁にもつかす、（「つかす」を見せ消ちにして「あらす」と左側に朱書す）義にもよらす、唯（「唯」の左側に見せ消ち）若き時より横さまにすける事ありて、暫く生涯のはかりことゝさへなれは、万のことに心をいれす、終に無能無才にして此一筋につなかる。凡西行・宗祗の風雅にをける、雪舟の絵に置る、利久か茶に置る、賢愚ひとしからされとも、其貫道するものは一ならむと、背をおし腹をさすり、顔しかむるうちに、覚えす初秋半に過ぬ。一生の終りもこれにおなしく夢のことくにして又〳〵幻住なるへし。

先たのむ椎の木もあり夏木立
頓て死ぬけしきも見えす蟬の声

元禄三夷則下　　芭蕉桃青

此書面所々消シて脇書あるまゝに写したる也。伝写の誤にてなくはせをの再案とみゆる也。文中に雪舟の絵におけるといふより貫道する物は一ならんといへるは、笈の小文にあるおもむき也。もとより笈小文乙州出板なから全き物とは見へす。此記も共に草稿ならん。又文操の評に「賦の花やかなるを捨て記の花実備れるをとる」とあれは其意をくみて、はせをの捨たる賦と此難波より得たる記とは予か選の文集にはいれす。此文考に書のせて異同を知つて猿みのに出る記をとるへきの便とす。

○続日本紀ニ「聖武天皇天平九年春詔ニ天下一毎州建国分寺。」○釈名云「山ノ足ヲ曰レ麓。山ノ穴曰レ岫。未及上ヲ曰ト翠微。」しかれとも又翠巖の誤字しや不詳。　○東見記曰「日本神道有ニ三種。一ニ曰ニ唯一宗源。唯一ノ二字一条院雖レ曰レ加レ之但吉田兼延加レ之以為レ得ニ其実一也。二ニ曰両部習合。三日本迹縁起此社家者流。禁中謂テレ之日ニ卜祝随役。此外有ニ天子之神道者。知之者亦秘而不レ言レ之。羅山先生耳語而相伝焉。曰理当心地神道也。」（頭注「和論語幷日本宝訓ニハ大職冠鎌足ノ言也」）○可成談云「兼倶か唯一といふ事をいひ出。」○老子経曰「和光同塵。」○神さひとは　年宿（カミヒサ）、又上久（カミヒサ）、又神久（カミヒサ）とも書。宮居久しき心也。萩の枝折　○元禄三年芭蕉四十七歳。　○元禄二年奥羽行脚の句に「早苗にも我色黒き日数かな。」　○かいつふりをにほ鳥といふ。江州湖水に多き故にほの海といふ。ワクカセワ又鳰の浮巣御傘　○茨は風俗文選にフキと仮名附あり。○拾玉和歌集に「山をわけ花を尋て日は暮ぬ宿かし鳥の声もかすみて。」　○元禄二年奥羽行脚に仏頂和尚の庵の跡にて、「木つゝきも庵はやふらす夏木立。」　○八景瀟湘夜雨洞庭秋月。○呂氏春秋曰「東南之風ヲ曰ニ薫風。」　○家語「舜弾五絃之琴歌南風之詩。曰南風之薫兮レルアリ。可ニ以解ニ吾氏之慍。」○孟浩然カ臨洞庭湖詩ニ「八月湖水平。涵シテレ虚ヲ混スニ太清ニ。気ハ蒸ス雲夢沢。波ハ撼ク岳陽城。欲レ済無ニ舟楫一。端居シテ

恥ッ二聖明ニ一。坐カラ観ルニ垂レ鉤ヲ者一。徒ニ有ニ羨レ魚ヲ情一。」唐詩選

○山家集に「おもひやる心や花にゆかさらんかすみこめたるみよしのゝ山。」○城州宇治郡笠取山。○拾玉和歌集「大井川星こそ波にうかひぬれ螢飛かふ夕闇の空。」○辟字彙ニ云「与レ癖同。」○宋詩抄巻四欧陽脩ガ雨後独ニ行洛北一詩ニ「秋色満郊原。人行禾黍間。雉飛横断澗。燒響入空山。野水蒼烟起。平林夕鳥還。嵩嵐久不見。寒碧更孱顔。」○或人云「孱顔は春の景色に山笑といふかことし」と也。○晋書「王猛華於華山懐佐世之志。桓温入レ関猛被褐而詣之。面談ニ当世ノ之事一捫レ虱而言。旁若レ無レ人。」○厳ハ字彙ニ猶レ尊。○白氏文集聞ニ亀児詠一「怜渠已解弄ニ詩章一。揺レ膝支頤学二即。莫学二即吟太苦。年纔四十鬢如霜。」○李白贈ニ杜甫一「飯顆山前逢ニ杜甫。頭載笠子日卓午。為レ問縁テレ何ニ太瘦生。只為ニ従前作レ詩苦。」○新千載集「山里の軒はにちかき椎柴のしゐてうき世にいつまてかへん永福門院」

洒落堂記

考に洒落堂は珍碩か号也。白馬集に此記あり。四方よりの句発句集に元禄四年とす。さもあるへし。○論語「知者楽水仁者楽山。知者動仁者静。知者楽仁者寿。」○宗鑑は讃州琴弾山の辺に住て一夜庵といふ。庵に狂歌を掛たり。「上は来す中は来て居ぬ下はとまる二夜とまるは下々の下の客」（頭注「滑稽太平記」）○挙白集山家記に「函丈二間瓦ふくもの二つ。」○茶の湯に四畳半は方丈の室にならふといふ。茶道に大黒庵紹鷗は千利休の師也。

紹鷗侘之消息

侘といふ言葉は故人も色〳〵に歌にも詠しけれとも、ちかくは正直につゝしみ深くおこらぬさまを侘といふ。一年のうちにも十月こそ侘なれ。定家卿の歌にも、

いつはりのなき世なりけりかみな月誰かまことより時雨そめけん

とよみとりけるも、定家卿なれは也。たか誠よりとは、心言葉も不及所をさすかの定家卿にも御入候。ものことの上にもれぬところ也。茶事もと閑居して物少を楽居ける所へ、知人とふらひ来て茶をたてもてなし、何かなと花を生てなくさめ候すかたにて候。師（頭注「紹鷗ノ師ハ称名寺ノ僧珠光也」）よく聞置くに、一つとして心のはなるゝしよさはなく候。是も心と心のつかぬ所にてなす心を本性といふなれは、我しらすによきに叶ふ所か奇妙ともいふへきやと仰候。難有事にて候。御身は唯人ニ而ましまさす候。きく耳見る目知り得たる物あれは一分の明徳くもりなく候。我等は心にはとくとてつして楽候得共口には言へたにていはれ不申候。言葉にあらはすほと道の本意か落申候てあさまに聞へ候ものにて候。天下の侘の根元は天照御神にて、日本国の大王にて、金銀珠玉をちりはめて殿つくり被成候へて御入候とも、誰あつてし

るものは無之候に、かやふき黒米の御供、其外何から何迄もつゝしみふかくおこたりたまはぬ御事世に勝れたる茶人にて候。ふるきを不捨新敷を不求といふ所要にて候。今さへふるきを求宝となし候風俗ニ候へは、なけかは敷は後代にてはかけもかたちもなくなり、あき人のわさに成り行可申候といとかなしく候。侘といふ文字宮法予歳曰か工夫候へとも、埒も明き不申候。本来物のなき人は手に入かね可申候。あなかしこ。

八月五日　　大黒庵判

宗易得人

○茶道の教に「法度にかゝはらすして法度にそむかす」の常語あり。　○東坡か西湖の詩に「山色空朦雨又奇。欲抱西湖比西子。淡粧濃抹也相宜。」　○うら若葉集に「我老吟をあまなふ人々は雲烟の風に変して跡なからん事を悦へる狂客なり」とはせをのことはあり。

石白頌

考に白氏文集（頭注「白氏文集巻二十二」）「中隠・大隠住ニ朝市一。小隠入ニ丘樊ニ一。丘樊冷落（スサマシ）。朝市太囂ニ諠（ナリ）一。不如作中隠。隠テ在ニ留ニ司ノ官ニ一。似出復似ル処スルニ。非レ忙（シフスル）ニ亦非レ閒。不労ニ心ト与ヲ力ヒ。又免ニ飢与ヲヒ寒。終レ歳無ニ公事一。随レ月有ニ奉一銭一。君若シ好ハニ登臨一。城南有ニ秋山一。下略」　○商山四皓ハ秦時夏黄公綺里季角里先生東園公避レ秦隠ニ商山ニ一。行歌ニ紫芝曲ヲ一。漢ノ高祖累聘（スレトモ）不レ至。後用ニ張良計一。乃出随太子朝。（頭注「円機活法」）　○竹林七賢晋時、阮籍・稽康・山濤・向秀・劉伶・王戎・阮咸。　○王戎後歴レ官至ニ司徒一。　○阮咸後歴散侍郎。　○稽康拝中散大夫。　○山濤ハ官至ニ右僕射一贈ニ司徒一。　○向秀後為ニ散騎常侍一。○阮籍為散騎常侍転従事中郎。○劉伶為ニ建威参軍一。蒙求○花山上皇ハ元享釈書睿筭一十九初帝亡ニ弘徽殿妃一。自厭ニ世相一当ニ妙齢ニ一。脱ニ屣金輪（レイ）宝位。又不レ受ニ太上天皇尊号一。偏奉ニ僧儀一修ニ密法一。五畿霸区多所ニ游歴一。又入ニ紀州那智山一不レ出三歳。　○聖一国師ハ釈弁円。字円爾ト云。元享釈書曰「嘉禎元年泛海十寅夕而着宋州明州界云云。」（頭注「四条院御宇。将軍頼俊。執権北条泰時。仁治二年帰朝」）又云「仏鑑一見器許未レ浹（ワタラ）レ句ニ侍ニ巾瓶ニ一。晨昏参請シテ優柔飫厭（アクマデ）会中皆大竜象也。保寧覚即庵掛牌開室。日東山慧西巌両板首爾周ニ一旋シテ三老ニ而請ニ益ス。倫断橋知別山一環溪敬簡翁、源霊叟、坼方庵、寧兀、曇希叟之儔、預シテ弁ニ衆事ヲ一。爾咸莫レ逆頗受磋磨之功下略。」（頭注「磋字彙石名恐磋誤」）○同書ニ「役小角者年三十二棄家入ニ葛木山一。居巌窟三十余歳。藤葛為衣松果充食。」　○聖一小角に曰の事いまた不知。猶可尋。○たのしきはゆふかほたなの下すゝみとゝはてゝらにめはふたのして」誰やらの狂歌出処を失す。

元禄四

雲竹の讃

考に笈日記京都部に「雲竹自画像」と前書ありて支考云「湖南の幻住庵におはす時の作也。君は六十、我は五十といへる老星聚の前書侍りけるか、あやまりておほえ侍らす」とあり。○芭蕉書簡集に「御手本之風義随分認候得共、下地無器用もの故うつり兼申候。御直し可被下候」と雲竹への文あり。

杵折の讃

考にかくれたる事なきや。此讃はせを句選拾遺に有り。

元禄四か

卒都婆小町讃

文鑑狂云。此一篇ハ短簡なから六箇の尊の字を用ひ六箇の蓑笠を用ひて然も其句にいひつゝけたる。さるは畳字ともは語とも古楽府の体にも似たらんか。但此賛は湖南の才陀亭に在りて其絵は三井の定光坊に在りとそ。

考に此讃元禄五年の己か光集にあり卒塔婆小町謡にあり玉造り小町の事前に出。

西行上人賛

考にいつれの年にや不詳。此哥山家集西行物語にも見えす。

骸骨賛

考に元禄七年の続猿みのに此前文あれと賛とはなし。本間主馬俳名丹野といふ。○荘子至楽篇「荘子之楚ニ見ニ空シキ髑髏ヲ一。髐然有レ形。撽以ニ馬ノ捶一。因而問レ之。曰夫子貪リレ生失レ理而為レ此乎。将タ子有ニ亡国ノ之事斧鉞之誅而為レ此乎。将タ子有テニ不善ノ行一愧レテ遺コサンコトヲニ父母妻子之醜ヲ一而為レ此乎。将子有凍餒之患而為レ此乎。将子春秋故及此乎。於レ是語卒援ニ髑髏ヲ一枕而臥ス。夜半髑髏見夢曰。子之談者似ニ弁士一。諸子所ハレ言皆生人之累也。死則無此矣。子欲レ聞ニ死之説一乎。荘子曰然。髑髏曰死無レ君ニ於上一無レ臣ニ於下一。無四時之事従然以天地為春秋。雖南面王楽不レ能レ過クルコトレ也。荘子不シテレ信曰吾使下司命一復一ニ生シ子カ形一為ニ子カ骨肉肌膚一反中子カ父母妻子閭里知識ニ上。子欲スルレ之乎。髑髏深嚬蹙頞曰吾安能棄ニ南面王楽一而復為人間之労乎。」郭注旧説云「荘子楽ミレ死悪レ生。斯説謬矣。若然何謂斉。所謂斉者生時安レ生ニ死時安死生死之情既斉。則無レ為ニ当テレ生ニ而憂ヒ死耳。此荘子之旨也。」○東坡か九相詩「骨散相ニ蕭疎。蔓艸遂纏レ骨。散レ彼捨レ斯求ルニ難レ得。爪髪分離盈ニ野外一。頭顱醫敗在ニ岩端一。西陵雨夕年々朽。東黛風ノ時処々残。忽成竜門原上土。枯栄不識昔誰棺。」と見えて其画をなして歌あり。「露の命きえにしあとを見よ顔に尾花かもとに残るかはねを。」

歌仙賛

考に荘子齊物論篇云「汝聞ニ人籟一而未レ聞ニ地籟一。汝聞地籟而未レ聞ニ天籟一夫。子游日敢問フニ其方一。子綦曰夫大塊噫気其名為

風。是唯無レ作作。則万竅怒号而独不レ聞二之寥々乎トシテ山林之畏隹スイタルコトヲ一。大木百囲ノ之竅穴似レ鼻似レ口似レ耳似レ枅ケイ似レ圈ニ似二洼タル者ニ一似二汚者ニ一。激タル者謞者叱者吸者叫者激エウタル者咬者アリ。前ナル者唱ヘテレ于ト而随者唱レ喁ト。冷風則小和。飄風則大ニ和ス。厲風済則衆竅為ナンヌレ虚ト。独不レ見二之調々タルトノ之才チウタルトヲ一乎ヤ。　○円機活法云。晋孫綽作天台山賦。成示二范栄期一。范栄期曰郷賦擲地当レ作二金石声一。」（頭注「文選傍訓金声アリ。脱二石ノ字ヲ一」）

元禄元

閑居箴

文鑑ニ「狂云、此題は大学の辞をかりて、間は閑也小人の独所也と、朱氏か註にも云へりとそ。去れは此篇は隠者の常情にして、或時は世を疎み或日は人を懐しむ。本より心神不定ならんは、頓阿も風月の情に過たりと、兼好法師の箴たる俤ならん。誠に此篇は前後に翁の字を用ひて、自己の散乱を箴たる首尾の文法を見るへき也。但し此篇は切字の発句ともいふへきやと、故翁も語り給へりとそ。常に我師は此事をいへり。」

考に玉葉集に「花見にとむれつゝ人のくるのみそあたら桜のとかにそありける。」新古今集ニ「とめこかし梅さかりなる我宿をうときも人のおりにこそよれ。」二首西行○徒然艸に「日くらし硯にむかひ、そこはかとなく書つゝれは、あやしう物くるおしけれ。」元禄四年の勧進帳といふ路通選の集に、深川夜雪の前書ありて文はなし。葛の松原にも見えたれと此文はなし。　○元禄二年より四年迄遊杖にて、四年の冬深川帰庵なれは、此句元禄元年にや、

自得箴

考に先手後手集に自得箴とありて、「もらふてくらひこふてくらい、飢寒わつかにのかれて」とあり。（頭注「先手後手は広岡宗瑞選」）杉風家蔵真跡には「もらふてくらひこふてくらひ、やをらかつえもしなす、としの暮けれは」とありて、此句末に「貞享丁卯秋」とありて題名なし。

白髪吟

和漢文操に此句の次に、

まいる心のかゝみなからに

とありて評云「此吟は遺稿の夜話に題類の評論あり。其論の略文に、故翁嘗て官を辞し給ひ、故郷を隔る事二十余年にして或ル年此懐旧あり。さるは天和の始とそ。其後伊賀の西麓庵にて例の文稿を改るとて、今思ふに白髪の魂祭は其日の感情は演たれと、発句は祭る姿に非す。此故に参の字を以て歩行の様を形容せしに、当季の詞も慥ならす。増て切レ字の入レ処なし。此等や有様躰アルヤウと云て「まいる心のかゝみなからに」と下の句をいひ次きて、俳諧の歌も然るへきやと云へるに、

実も前書の咏嘆より墓参の哀傷を評せは、玉屑にいへる蛍螢の悲み有て吟の字を題せんにはと、漢家に杜陵か三字を仮りて白髪吟とは題せしなり。誠に題類の大切なる、此等の詮義に知へしと。但此論は古文後集に、黄堅氏か麁末の沙汰なり。然は今の歌の類に詞曲吟讃の類あるは、漢家には文選に随ひ本朝には文粋に效ひて、詩歌は本より一根なる故に、此等の題を交たる也。後の人例の考へし。

考に続猿みの集に「甲戌大津に侍りしを、このかみのもとより消息せられけれは、旧里に帰りて盆会をいとなむとて」と前書有て、「家は皆杖に白髪の墓参」とあり。　○今文集に出す処の白髪吟は、和漢文操にある文にして、此文は貞享元年の野さらし紀行の文を、はせを沒後支考か増減して、墓参の句の詞書に取合たる物なるへし。野さらし紀行には、

長月の初古郷に帰りて、此堂の萱草も霜枯果て、今は跡たになし。何事も昔に替りて、はらからの髪白く眉皺寄て、只命有てとのみ言て言葉はなきに、このかみの守袋をほときて、母の白髪おかめよ、浦島の子か玉手箱、汝か眉もやゝ老たりとしはらくなきて、

手にとらは消んなみたそあつき秋の霜

かく有を、「文月の魂祭る頃武陵より古郷へ帰る」とあらため、又「萱草も霜かれて今は其俤たになかりしか」と直したり。紀行は句も秋の霜かれも長月の頃にてあるへきに、七月の詞書にはいかゝなから、其俤たになかりしがとがの字にて過去にして、かゝる事もありしか何事もむかしにかはりてと是より又即今の事に書なしたれとまきらはし。是しきの事知らさる支考にあらねとも、其世の俳諧者達を眼の下に見れは何をいふてもと心の大きさゆへならんか。○宇陀法師に「杖に白髪や」とあり。行状記には「白髪に杖や」と有り。許六も此句当季の詞慥ならぬよしあれと、季吟の増山井七月の季に墓参りとあり。

机　銘

考に三つのシツカの字をいへる。始の間(カン)なるは間隙にてヒマなる時、中の仮名にてシツカといへるは閑寂のさひしき時、終りの静(シツカ)は動静の静にしてうこかすに居る時にや。　○晋王羲之・唐懐素ともに能書。（頭注「張懐瓘書断姜。書譜等」）

○易経乾卦云「元亨利貞初九潛竜勿用九二見竜在レ田利見二大人一。」註云「出レ潛離レ隱　故曰二見竜一。処二地上一。故曰レ在レ田。德施周普居レ中不レ偏。雖非二君位一君德也。」　○坤元亨利(アリ)ニ牝馬之貞ニ。註云「坤貞之所レ利於牝馬也。馬在レ下而行者也。又牝馬順之至也。至順而乃。享故唯利二於牝馬之貞一。」○此銘いつれの年にや不詳。

座右銘

考に梁太子文選ニ「座右銘崔瑗無レ道二人之短一。無レ説二己之長一。」註云「自戒嘗置二座右一。故曰座右銘。」○小文庫に有り。

（頭注「小文庫に応蘭子求元禄仲冬芭蕉書」）

渋笠銘

文操註云△竹取の翁の事は万葉に長歌あり。挙るに不及。△つれ〳〵草に「妙観かかたなはいたくきれす」とあり。△撰集抄に「もゝすちりゆかみ坊まかれるなからに往生す」といへる。其ことはを互照して、次に西行を出すへき断続の筆法なり。△富士見西行の笠の図は画師の家の形容也。△東坡か戴レ笠乗レ駝といへる雪中の図は和漢に多し。○古今に宮城野の哥は前に出たり。詩仙叢話に「笠重呉天雪。屐香楚地花。」　○宗紙の発句に「世にふるもさらに時雨のやとりかな。」同評曰「此銘は諸集に出てこゝかしこのたかひあり。さるは元禄甲戌の夏、伊賀の西麓菴にいまして、文稿十三篇の再校ありしか、此銘も其一篇也。されは遺稿の夜話にいへる。今や故翁の遺文とて傍聞の麁抹は論にたらす。風国か泊船集のことは落柿舎にたよりて人も信すへけんか、まさにおそるへきは古文のたかひめならん。たとひ自筆の遺文ありとも、我と我文にむかふ時に語路の拍子のたかふもおほからん。滅後の選論は此大事をしるへしとそ。さて笠のうらに物書給ふは、祖翁の在世にあまたありて、伊賀より芳野の紀行には、万菊丸をくせられて、桜見せふその狂筆あり。されと其笠の行衛を聞す。其後木曽寺の形見わけに、湖東の孟耶観につたへられ、笠塚の銘に残されしは洛の野童子か作れる笠也。或は武江の発句塚とは今の発句の短冊を埋めるよし。しかるを例の泊船集には「やとり哉」を「しくれ哉」と出せり。さるは羽の鶴岡に住せる沢嵐七か掛物には、笠やとりの前を加へられ、直筆の証文あれはこれらに選論の用をしれと也。」考に「渋笠銘」とあるへきを「笠やとり」と前書せしや。しからは挙白集・さかころも・鉢たゝきのたくひの題名にならへるか。天和三年の虚栗集に「手つから雨のわひ笠をはりて」と前書あり。

檜笠銘

考に貞享五年の笈の小文に「弥生半過るほと、そゝろにうき立心の花の、我を道引枝折となりて、芳野の花に思立んとするに、かのいらこ崎にて契り置し人の伊勢にて出むかひ、共に旅寝のあはれをも見、且は我為に童子となりて、道の使ともならんと、自万菊丸と名をいふ。まことにはらへらしき名のさまいと興あり。いてや門出のたはむれ事せんと、笠のうらに落書す」と有て、此前文と句あり。是等銘とも名つくへきやと、文集に是ひとつを此度加へたる也。

東順伝

考に元禄六年萩の露集に、（頭注「其角選。角菩提所二本榎上行寺日蓮宗」）

はゝき木の七とせ先に榎の陰の露と消えしも、さらぬ俤

思ひ出てはなくさめかねし心なり。

信濃にも老か子はありけふの月　其角

かく書付て病床をうかゝひ侍るに、

子と姥とりかへて見んけふの月

と見えたり。（頭注「樗雲云、其角か弟信州にあり。此秋七月より八月始迄来りて看病をせしとそ」）　○円機活法云「范丹字史雲。好ヲ違レ時絶レ俗為ニ微詭行ヲ一為ニ萊蕪長一。閭里語曰。甑中生レ塵。范史雲釜中生レ魚。范萊蕪。」　○白氏文集云「大隱住ニ朝市一。」

元禄二

弔古戦場文

考に奥の細道より切出したる物也。　○三代は清衡・基衡・秀衡。　○杜律春望ニ国破山河在。城春草木生。」　○註菅菰抄にくわし。

嵐蘭誄

考に周礼夏官司馬の注疎に云「古皮を用ゆ。これを甲と云。金を用て鎧とす。金に従て宇をつくれは也。」大白陰経に云「蚩尤（ユウ）革を割て甲を作る。」以上武用弁略　○古今集「よのうきめ見へぬ山路へいらんにはおもふ人こそほたしなりけれ」ものゝへのよしな　○萩の枝折に云「物につなかれて、身のおもふさまにならぬをほたしといふ。」　○論語雍也篇云「文質彬々然後君子。」○老子経曰「寵辱若レ驚貴ニ大患一若レ身。」　○王註云「寵必有レ辱。栄必有レ患。寵辱等栄患同也。」　○晋書ニ「王戒字濬沖。琅邪臨沂人。幼穎悟神彩秀徹。視テレ日不レ眩。裴楷見而目シテレ之曰我眼爛々如ニ巖下電一。」　○あるときはありのすさみにかたらはてなくてそ人は恋しかりける。　○此文うら若葉集にありて、題名は「悼嵐蘭詞」とあり。其末に其角云「此悼の詞は翁存生の時、病心をなやましかく書つゝりけれともとて、懐中し来り給ひて、追善興行の事共まて相談に被及、予か机の端に残されたる也云云。」　○嵐蘭は東武の住。元禄五年深川芭蕉庵に遊ひて深川集あり。同年夏はせを上京也。依て元禄六年なるへし。（頭注「天和二年の武蔵曲集二嵐蘭句アリ」）

素堂の蓑虫の賦を聞て

考に此文は杉風か子孫家蔵の一軸にありて、樹の枝に衰虫の画英一蝶筆にてはせをの讃に「蓑虫の音を聞にこよ艸の庵」とありて、其次に素堂の文あり。（頭注「素堂の文風俗文選にも出」）

招に応して虫の音を尋　素堂主人

蓑虫〳〵声のおほつかなきをあはれふ。ちゝよ〳〵となくは孝に専なるもの。いかに伝へて鬼の子なるらん。清女か筆のさかなしや。よし鬼也共瞽叟を父として舜あり。汝は虫の舜ならんか。

蓑虫〳〵声のおほつかなくてかつ無能なるをあはれふ。松むしは声の美なるかために籠中に花野を啼。桑子は糸を吐によりからうして賤か手に死す。

みの虫〳〵無能にしてしつかなるをあはれふ。胡蝶は花にいそかしく、蜂は蜜をいとなむより往来おたやかならす。たれかために是をあまくするや。

みの虫〳〵かたちの少しきなるをあはれふ。わつかに一滴を得れは其身をうるほし、一葉を得れはこれかすみかとなれり。竜虵のいきほひあるもおほくは人の為に身をそこなふ。しかし汝かすこしきなるには。

みの虫〳〵漁父か一糸をたつさへたるに同し。漁父は魚をわすれす、風波にたへす。幾度か是をときて酒にあてんとする。太公すら文王を釣ルの譏あり。子陵も漢王に一味の閑をさまたけらる。

蓑虫〳〵玉虫ゆへに袖ぬらしけん。田蓑の島の名にかくれすや。生るもの誰か此まとひなからん。鳥は見て高くあかり、魚は見て深く入。遍昭か蓑をしほりしもふるつ事を猶わすれさる也。

蓑虫〳〵春は柳につきそめしより桜か塵にすかりて定家の心を起し、秋は荻ふく風に音をそへて寂蓮に感をすゝむ。木からしの後は空蟬に身をならふ。体も身も共にすつるや。

又以男文字述古風

蓑虫々々　落入二聰中一　一絲欲レ絶
寸心共空　似二奇居ノ状一　無二蜘蛛ノ工一
白露甘レ口ニ　従二容トシテ侵レ雨　飄然トシテ乗レ風
栖一鴉莫レ啄　家童禁レ叢　天許作スコトヲレ隠
我ハ憐ム称スルコトヲレ翁　脱二蓑衣一去　誰識ンニ其終ヲ一

貞享至南日誌丁亥即蚊足書

とありて此はせをの文あり。○詩をほめて「錦繡段」と題せる書有り。○文選に離騒あり。漁父辞のたくひ。　○詩人玉屑曰「詩欲二其好一則不能好矣。王一介甫ハ以レ工。蘇子瞻以新。黄嘗直以奇。」○史記本紀曰「舜父瞽叟頑母嚚弟傲。皆欲レ殺レ舜。舜順ヒ適フテ不レ失二子ノ道ヲ一。兄弟ニ孝一慈アリ。不レ可レ得即求レハ嘗在側。舜年二十以レ孝聞。」○家語弟子行篇ニ「孔子曰、孝ハ徳之序也。信徳之厚也。忠徳之正也。参中ニ夫ノ四徳ニ一也。」○荘子人間世篇云「以為舟則沉。以為二棺槨一則速腐。以為器速毀以為門戸則液樠ス。以為桂則沉ス。是不材之木也無レ所レ可レ用。故能若是之寿ナリ。」（頭注「樠謂脂」）○同齊物論篇郭象註云「物皆自得之耳。」○唐書志天宝元年詔封荘子為南華真人。○古今集序に「人の心花になりにけるより、あたなるうた、はかなきことのみ出くれは、色このみのいゑには、むもれ木の、人しれぬことゝなりて、まめなるところには花ずゝきほにいたすへき事にもあらすなりにたり。」○朝湖は英蝶か名。　○丹青は彩色之画。出小補韻会。

瓢銘奥書

考に七柏集ニ素堂瓢銘幷此文あり。其銘ニ云、

四山

一瓢重泰山　自喫称ニ箕山一

莫レ習ニ首陽山一　這中飯顆山

葛飾隠士素堂書

とありて此文あり。（頭注「蓼太選。初学記泰山五嶽之東嶽。逸士伝。許由隠箕山。無盃器以手捧水。人遺一瓢得以操飲七訖桂樹上風瀝々有声。由以為レ喧遂去之。○史記伯夷伝云、遂餓ニ死於首陽山一。」）○論語雍也篇「子曰、賢哉回也。一簞食一瓢飲。在陋巷。人不レ堪ニ其憂一。回也不改其楽。」（頭注「簞ハ竹器」）○荘子逍遙遊篇云「恵子謂荘子曰魏王貽ニ我ニ大瓠ノ之種一樹レ之成而実五石ハカリ。以盛水漿。其堅不レ能ニ自挙一也。割レ之為レ瓢則瓠無レ所レ容。非レ不ニ呺ニ一然トシテ大ナラ一也。（頭注「呺然虚大貌」）吾為其無レ用捔レ之。荘子曰夫子固拙ニ於用ルニ一大矣。中略此末文ニ今子有五石瓠。何不レ慮下以為ニ大樽一而浮コトヲ中乎江湖ニ上。」○鶡冠子云「中流失ヘハレ船一瓠モ千金。ヒサコヲ腰ニツクレハ水ニシツマヌナリ。瓠ヲ壺ノ字トナス時ヒサコナリ。ツホニハアラス。」以上童観抄　○李曰贈杜甫詩ニ「飯顆山前逢杜甫。頭戴ニ笠子一日卓午。為レ問縁レ何ニ太瘦生。只為ニ従一前作レ詩苦ムカ。」

弔初秋七日雨星

考に此文小文庫・泊船集等にあり。○古文前集張文潛七夕歌ニ「人間一葉梧桐瓢。蓐収行秋回ニ斗杓一。神ン官ヲ召シ集メテ役ニ霊鵲一。直渡ニ銀河一横作レ橋。」○後撰集に「いそのかみといふ寺にまうてゝ日暮にけれは、夜明てまかりかへらんとてとゝまりて、此寺に遍昭か侍ると人のつけ侍りけれは、ものいひこゝろみんとていひ侍りける、

岩の上に旅寝をすれはいと寒し苔の衣を我にかさなん　小野小町

返し

世をそむく苔の衣はたゝひとへかさねはうとしいさふたり寝ん　遍昭」

贈風絃子号

考にいまた其出処をしらす。○荘子逍遙遊篇ニ「子游曰地籟則衆竅是レ已ノミ。人籟則比竹是已。敢問ニ天籟。子綦曰夫吹万不レ同シテ而使ニ其自ヨリヒ已レ也。咸其自取ル。怒者其誰邪。註云此一竹ハ笙簫之類。」○吹万万物之有声者也。言万物之有声者皆造物吹レ之而皆使其若ナラニ自レ已出一。吹字使字皆属ニ造物一。自取者自取レ已レニ也。咸其自ラ取トハ言ハ万物皆以為シテ我所トニ自ラ能クスル而不レ知ニ一気ノ之動一。」○三礼図曰「琴第一弦為レ宮。第二弦為レ商。次ヲ為レ角。次ヲ為レ徵。次ヲ為レ羽。次ヲ為ニ少一宮一。次ヲ為ニ少一商一。」

富士

考に渤海十州記曰「山ニ有ニ三角一。其一角正ヲタル二于北辰ニ一。名ニ閬風巔ト一。其一正西。名ニ玄圃台一。其一正東。名ニ崐崘宮一。」○史記「海中有ニ三神山。名曰ニ蓬萊方丈瀛州一。」○烏丸光広卿詩に、「毎ニ見ル士峯憇口号。九天霞霽仰弥高。荘周曾曰泰山北ナリト。一ケ比倫秋兎毫。」○荘子逍遙遊篇「藐姑射之山有人居焉。肌膚若氷雪。綽ニ約シテ若処子不食五穀吸レ風飲レ露乗ニ雲気一御飛竜而遊ニ乎西海之外一。」（頭注「綽ニ柔媚可愛也」）○この文は芭蕉句選拾遺に有りて、頭書に「甲州吉田の山家に所持の人ありしを、今東武下谷匏志秘蔵なるよし。行脚祇法より伝写して出す」と見えたり。○芭蕉天和二年甲州遊杖也。其頃の作にや。文も句も元禄体とは思はれず。○東山墨直しに支考云、「世に古翁の発句とて富士よし野に句あれとも、全く人の聞たかひなるへし。一とせよし野紀行を出して、我ために文章を論せられし時に、吾かつて富士吉野に対して一字一唱の作なし。」○此物語元禄体の事にや。猶可考。

松　島

考に此文もはせを句選拾遺にありて、此文愚案にさためかたき事あり。奥の細道には「松島は扶桑第一の好風」と有りて好風はよき風景といふ事にきこゆるを、是は下に又景といへる処幷風情とありて、又思ひをよせとし、又こゝろを尽しとし、それのみならす、たくみをめくらしといひて、又天工と同し様なる詞のかさなり、又は島〳〵と前文にいひて句も又島〳〵やとし、又島〳〵やと切りて、又千々にくたきてといふ。されは元禄の句体とはうたかはし。まして奥の細道松島の段に「松島や鶴に身をかれ時鳥　曽良予は口をとちて眠らん」としていねられす」ありて松島に句なし。

尋草の戸

考に芙蓉文集に此詞書あり。（頭注「蓼太選」）○芭蕉句選拾遺に「浅草或人の菴にて」と前書有り。頭書に「貞元」とし発句集には貞享元年の部に見えたり。

義色の語

考に註に及す。

古郷歳暮

考に此文は桃鏡選の芭蕉文集にありて、句は貞享四年の笈の小文に見えたれと、此文はなし。

時雨留別

考に是に千鳥掛集に有りて、梅枝の謡の文句を其儘に前書とせる也。句は笈の小文貞享四年也。

元禄

贈洒堂

考に是は元禄七年洒落堂珍碩選の市の菴集に有り。○夫木

集に「牛の子にふまるな庭のかたつふり角あれはとて身をなたのみそ　寂蓮」

須　磨

考に是は芭蕉真跡集に出て、句は貞享五年の笈の小文にあり。文は小文とは違ふ所あれと、其意は同し。　○源氏物語須磨の巻に「すまにはいとゝ心つくしの秋風に、海は少し遠けれと、行平の中納言の関ふきこゆるといひけん浦浪よる〳〵はいとちかくにきこえて、又なく哀れなるものはかゝる処の秋なりけり下略。」又同し巻に「月いとはなやかにさし出たるに、こよひは十五夜なりとおほし出て、殿上の御あそひこひしく、所々なかめ給ふらんかしと、おもひやり給ふにつけても、月のかほのみまもらせ給ふ。」

駿河路

考に芭蕉真跡集に出て、桃鏡選の文集にも有り。　○芭蕉翁行状記に「島田には塚本氏・杉本氏なといひて、久敷音信馴し方あれはとて、おほつかなき五月雨の雲はらす、五月雨の雲吹落せ大井川」とみえたり。

答曽良

考に此文雪丸け集にあり。　○唐詩選邯鄲少年行高適「君不見今人交態薄。黄金用尽還疎索。」

笠　島

考に桃鏡選の文集にあり。元禄二年の奥の細道に、此詞書と少しちかへとも意は同し。　○八雲御抄に云「或説に、実方笠島の道祖神の前を下馬なくして通り給へりけれは、神前にて馬たふれて実方卒すと云。今に実方の廟其社のかたはらに有といへり。」

保美の里

考に桃鏡選の文集に出たり。（頭注「梅人云、此真跡保美村与八といふ者所持。俳名白梅下路喬」）○貞享四年の笈の小文に、保美村伊良古崎遊杖の事ありて、「鷹ひとつ見付てうれしいらこ崎」の吟あり。此句はなし。

文字摺の石

考に此文小文庫に有り。句は元禄二年の奥の細道に有り。○古今集河原左大臣「みちのくのしのふもちすりたれゆへにみたれそめにし我ならなくに。」栄雅抄に「天智天皇の御時、奥州信夫郡より、もちすりとてぬひすりのことくなる文のみたれたるを、年貢に奉る物也。一説みちのくの信夫郡に大なる石二つ有。其面平にしてもちのやうなるあり。藍にてすりたる布を年貢にすると見えたり。」

三ケ条式

考に桃鏡選の芭蕉真跡集にありて、此文はせをの作にはあら

す。されと「右三ケ条旧也」と筆を添たるははせをにや。延宝七年西山宗因直弟一時軒維中選の近来俳諧風体抄に、

平句一句一直　付雪月花同
出合遠近　　但声先次第
諸礼停止

と見えたり。是を省略せるものか。○元禄五年、山本西武門人随流か選の貞徳永代記ニ西武誹諧式目追加十首狂詠の中に、

誹諧の席にてせぬは先諸礼又高咄しさては大酒
誹諧も諸礼停止と言なからおもての句次人を見るへし
誹諧も先は一座に一直し墨付なくは猶もよくせよ
誹諧は金言妙句はきぬると老若貴賤出合遠近
誹諧はおそくてたけをかゆるとも人のまへをははい句致すな

○延宝三年の俳諧蒙求、是又一時軒維中選にして云「ある人貞徳老翁に俳諧さし合あらましの条々書付て給はれと所望ありけれは、十首の歌に詠して答へられし」とあり。

○十論為弁抄に

五条式
一諸礼停止
一小語低声
一出合遠近
一月花一句

右は旧式を増減して貞享式の条目也。此外に千句の一条あり。自句二連とも三連とも連衆の多少によるへき也。万句は千句の法にかはらす。十百韻といふ時は一座の差別にして、一巻々に百韻の式也。しかれは座と一巻とは去嫌の用捨としるへし。さて旧式の出合遠近といふに、但声先といふ小書あれと、雪は八なれは其沙汰にも及はし、たとひ月の句といふとも、句順には皆々辞すへからす。花は決して一句なるへし。千句万句の一座にては、月花の用捨も勿論なれは、百韻の一座とても法式は例のやすき方によるへし。かたけれは不興の時もあらん。しかれとも、一座の法はおほむね古式をまもるへく、一巻の掟には古式の害なるもおほかるへし。

と見えたり。

行脚掟

考に此掟は柳居追善集の七五記にありて、其奥書に云「古翁真跡十七ケ条の掟は、野州那須野郡高久角左衛門方ニありとそ。雲鈴法師かいへる十七ケ条の掟といふは此事にやあらん」トあり。（頭注「延享六年松露菴左明選」）○雲の薄集にも此文ありて、末に「右之条々我門の行脚は可慎者也　桃青」とあり。（頭注「安永六年麦浪門人、信州の眠郎選」）○雲鈴は始其角門、後許六門、終りは支考門也。享保年中に卒す。行状は和漢文操にあり。

享和元辛酉歳八月